

日本聖公会「原発のない世界を求める週間」(2021/6/6～6/12) 企画

オンラインフォーラム

「原発はやめようよ」

報告書



前半プログラム : 5 / 30 (日) ～ 6 / 1 (火)

後半プログラム : 6 / 6 (日) ～ 6 / 7 (月)



主催：日本聖公会「正義と平和委員会」原発問題プロジェクト

地球環境のための祈り

天地万物を創造された主よ。あなたは、すべてのものを造られ、それらをご覧になり『よし』とされ、祝福されました。そして、その管理をわたしたち人間に委ねられました。しかし、東京電力福島第一原子力発電所による災害が示すように、わたしたちはあなたのご命令にそむき、自らの欲望を満たすために自然環境を乱用し、破壊さえしています。今、そのことの故に世界中の多くの人々が苦しんでいます。どうかわたしたちがあなたのご命令に立ち帰り、あなたによって与えられた自然環境を大切に保全し、後（のち）の世代のために残すことができますように。また、原子力発電所による災害など、環境破壊の被害者の苦しみを取り除き、わたしたちの生活を変え、自然と共に生きることができますように。そして、自然を通じてあなたが現されるご栄光を仰ぎ見ることができるようにしてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン

東日本大震災 10 周年記念の祈り

天地の創り主である主よ、今わたしたちは東日本大震災の発生から満 10 年の年を迎え、原発のない世界を求め、共に考え悩み、祈るためにここに集いました。東日本大震災の地震と津波によって、そして東京電力福島第一原子力発電所事故によって大きな苦難を受けた人々のため、そして私たちが歩むべき平和の道を願い祈ります。またその日から今日に至るまで、新型コロナ・ウイルス感染症をはじめ、幾多の災害が日本国内において、また世界の各地で起こりました。その中で犠牲となった人々、また今なお困難な生活が続いている人々のことも思い、祈ります。どうぞあなたの慰めと励ましのみ力がそれら多くの人々の上にありますように。多くの災害とともに、争い、憎しみの絶えることのないこの世界にあって、わたしたちがあなたの創造の美しさを回復させるため、小さな器として用いられますよう、力と導きをお与えください。苦しみ、悩む人々と共に歩まれる主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

1. もくじ

オンラインフォーラム「原発はやめようよ」報告書

地球環境のための祈り・東日本大震災 10 周年記念の祈り	1
1. もくじ	2
2. 実行委員長挨拶（長谷川清純 司祭）	3
3. 開会礼拝メッセージ（武藤謙一 首座主教）	4
4. プログラム	6
5. 公開講演会（講師：片岡輝美さん）	7
6. フォーラム 1 「教会とエネルギー」	9
7. フォーラム 2 （1）「核のゴミ」	13
（2）「原発事故」	16
8. フォーラム 3 「再生可能エネルギーの活用」	18
9. フォーラム 4 「私たちに出来ること。私たちの責任」	22
10. フォーラム 5 「私たちの教区・教会での働き」	28
11. 事例紹介 「おひさまプロジェクト」	33
12. 私たちの教区、教会の姿	35
13. 閉会礼拝メッセージ（上原榮正 主教・正義と平和委員会 委員長）	38
14. 参加者名簿	40

2. 実行委員長挨拶（長谷川清純 司祭・原発問題プロジェクト長）

「始めよう！原発はやめようよ」

東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所爆発事故で放射能汚染に晒された私たち日本聖公会のトピックスを簡単に振り返ります。2011 年 3 月 12 日緊急支援に入り、同年 5 月、「いっしょに歩こう！プロジェクト」が始動し（～2 年間）、故郷を追われ避難所、次に仮設住宅で暮らす被災者に寄り添いました。2012 年 5 月 23 日、日本聖公会第 59（定期）総会は「原発のない世界を求めて－原子力発電に対する日本聖公会の立場－」を決議し、教派・宗教を超えての連帯と、原子力発電所の撤廃、国のエネルギー政策転換を求めました。同年 9 月 14 日、2012 日本聖公会宣教協議会では、カトリックのシスター清水靖子さんが特別講演で、原発の利権やウソを暴きイエスのメッセージを伝えました。2014 年 10 月 23 日、日韓聖公会宣教協働 30 周年記念大会で「両聖公会は、世界聖公会の『宣教の 5 指標』を共有し、その一つである『創造秩序の保存と地球生命の回復と維持』のため、原発と放射能（核エネルギー）問題の深刻さを認識し、信仰の課題として取り組む」決議をしました。

2018 年 6 月 5 日、日本聖公会第 64（定期）総会において「原発のない世界を求める国際協議会」開催の件を決議し、翌年 5 月 28 日～31 日、「原発のない世界を求める国際協議会」を仙台市で開催して大会声明を採択しました。コロナ禍の 2020 年 10 月 28 日、日本聖公会第 65（定期）総会で「原発のない世界を求める国際協議会声明に賛同する件」と「原発のない世界を求める週間設置の件」を決議して、この度「オンラインフォーラム『原発はやめようよ』」が開催された訳です。

私たちは終始一貫、「核といのちは共存できない」と考えてきました。今回のフォーラムを終えるに当たり、参加者同士でこの言葉をしっかりと共有、共通認識されたことは、大きな成果だったと思います。このキーワードが日本聖公会内で分かち合われてほしいし、また広く日本中にこだまされなければならないとも考えました。

エネルギーは私たちの生活に欠かせないものですが、もしそれに抜き差しならない問題が絡んでいるとしたら、その問題を自覚しそれに向かい合っていかなければなりません。公開講演された片岡輝美さんからは、放射能に関する事実を知り、自身で考え、悩み、いのちに向き合う力強い証しがなされ、参加者の心を打ちました。

6 つの課題を用意してプロジェクトメンバーである尾関敏明さんから発題をし、参加者は 6 グループに分かれ、全期間をとおして発題後の話し合いを繰り返しました。そこでの親しい会話から、私たちの信仰や教区、教会とエネルギーとどのように関わっていったらよいのかが常に話題でした。例えば放射性廃棄物（核のゴミ）問題は、次世代への責任として捉えるとき私の問題になります。私自身の中では、「循環」の視点からこれら様々な課題の捉え直しをすると、の発見が与えられたフォーラムでした。主に感謝しつつ。 栄光在主＋

3. 開会礼拝メッセージ（武藤謙一 首座主教）

2021 年 5 月 30 日

主よ、わたしの岩、わたしの贖い主よ、わたしの言葉と思いがみ心にかないますように。
アーメン

今日から明日にかけて、また 6 月 6 日から 7 日にかけて「オンラインフォーラム『原発はやめようよ』」が開催されます。このフォーラムを準備してくださった正義と平和委員会原発問題プロジェクトの皆さん、またこの後の公開講演の講師を引き受けてくださった片岡輝美さんに感謝いたします。また参加くださった皆様にも感謝いたします。

昨年 10 月に開催された第 65(定期)総会において、日本聖公会は「原発のない世界を求める国際協議会声明」に賛同する決議をし、また「原発のない世界を求める週間」を設置することを決議しました。今回のオンラインフォーラムはこの「原発のない世界を求める週間」の一環として開催されます。わたしたちの出発点は 10 年前の東日本大震災、福島第一原子力発電所事故による放射能汚染です。その意味で、今日の公開講演で福島からのメッセージを聞くことはとても意味深く思います。3 月 11 日、わたしは矢萩総主事の運転で仙台まで出かけました。途中、高速道路を降りて 6 号線を北上したのですが、立ち入り禁止区域は 10 年前の痛ましい状態のままです。帰宅が許された地域でも家が解体されたままの土地が目につきます。国道から見える範囲だけでしたが自然、地域社会、絆が失われた光景を目にして何とも言えない気持ちになりました。片岡輝美さんの福島からのメッセージにしっかり耳を傾け、共に考えたいと思います。

原発問題プロジェクトのニュースレター第 14 号に何故、今このフォーラムをしなければならないかが記されていますが、このフォーラムは「結論を出すことよりも対話を通して理解を深めること、また協力のネットワークを作るための機会とすること」を願って開催されます。九州教区でも昨年 11 月の教区会で「原発のない世界を求める国際協議会」声明に賛同することを協議会で決議しました。その協議のなかでは「教会は誰に対しても開かれていなければならないはずなのに、原発反対の立場に立つことは、原発に関わる仕事をしている人たちやその家族を排除することにならないか」という意見もありました。日本聖公会は「原発のない世界を求める国際協議会」声明に賛同しましたが、まだまだ様々な意見、考えをお持ちの方がおられると思います。このフォーラムでの学びや気づき、提案が、各教区に持ち帰られて、それぞれの教会やグループで分かち合われ理解が深まることを願っています。

今日の開会メッセージについて思い巡らしていた時に浮かんできたのは、2012 年に開催された日本聖公会宣教協議会での清水靖子シスターの「脆い神」という言葉です(私はずっと「危うい神」と記憶していたのですが、報告書を読むと「脆い神」と書かれていました)。清水シスターは「パプアの森を守る会」に携わり、森林伐採される森を見つめる中で、熱帯林の生態が小さな脆い命の連鎖で成り立っていることを痛感し、その後の神学的思索のなかで「脆い神」と表現されました。聖書の神様は全知全能、強くて逞しいお方という面が強調されてきましたが、地球全体の危機的な状況のなかで、受肉した神様が、汚される大地の中、伐られていく木や、放射能汚染によって失われていくいのちの中で、無言の呻き声を発しておられる。森羅万象に受肉した神の視点、脆い神の視点から見直してみるものの大切さと、不正義の構造社会の中でキリストの弟子として genuine (本物という意味)に生きるものの大切さを語られました。

「脆い神」という言葉を最初に聞いたのは協議会の実行委員会でシスターをお呼びしたときでしたがとても衝撃的でした。また「本物を生きる」という言葉に、清水シスターのキリスト者としての誠実さと厳しさを感じたのを覚えています。私は今、本当にそう思うのです。原発、放射能の課題も含めて環境汚染、環境破壊は深刻です。そして熱帯雨林だけではなく、神さまが創造された被造物はどれも「良し」とされたものですが、同時に繊細で脆いものであることを痛感します。すべての命は互いが関わりあっており、少しでも相互のバランスが崩れると全体が大きなダメージを受けます。被造物の「良い」（美しさ）と脆さは表裏一体であり、神さまはそのようなものとしてすべての被造物をお造りになれたのです。それが「創造の秩序」の一つの意味だと言えるのではないのでしょうか。

「脆い神の被造物」とでも呼べるほど、地球全体が蝕まれ、そこに生きる多くの被造物が今やうめき声をあげている状況です。ごく一部の人の富と便利さの故にです。そしてそのなかに、わたし自身もいます。脆い神の無言の声をどのように聞くのかは、わたし自身がどう生きるのかに直結している課題です。

イエス様はニコデモに「人は新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」（ヨハネ 3:3）と言われます。「新たに生まれる」は「上から生まれる」とも訳することができますが、霊によって生まれるということでしょう。復活のイエス様に息を吹きかけられて聖霊を受けて派遣された弟子たちを思い起こします。弟子たちは聖霊を受けて和解の務めを果たすために遣わされる者として新しく生まれます。20 章 19 節以下の物語は弟子たちの再創造の出来事と言えるでしょう。

今、わたしたちにとって「新しく生まれる」「再創造」とは、脆い神の被造物として共に生きる、その生き方に新しく生まれるということではないのでしょうか。それが和解の務めを果たすことにつながると思うのです。わたしは脆い神の被造物として共に生きる、ということをごだれだけ無視していたのかを想わされます。そのように生きて来なかったと認めざるをえません。それは身近にいる生きる困難を抱えている人たちの声にも向き合ごてこなかったことにもつながります。自分自身が脆い者でありながら、そのことから目を背け、便利さや効率性を求め、それを手放すことに躊躇してしまう自己中心性や傲慢さ、罪深さを思います。だからこそ、この時に「上から生まれる」ことを真剣に求めたいと思います。

イエス様は「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである」（ヨハネ 3:8）とも言われます。聖霊はそのようにわたしたちを真理へと導かれる神です。その聖霊の導きに身を委ね、真理を尋ね求める歩みを大切にしたいと願っています。

このフォーラム、公開講演会の参加者お一人おひとりのうえに神様の恵みが豊かにありますようお祈りいたします。また日本聖公会の全ての教区、教会が「フクシマの出来事の証言者」として、「被造物の本来の姿を守り、地球の生命を維持・再生する」宣教の業を担っていきますように聖霊の導きをお祈りいたしましょう。

4. プログラム

(日本聖公会「原発のない世界を求める週間」2021・6・6～12)

<前半プログラム>

5月30日(日)

- 15:00～ オリエンテーション
15:30～ **開会の祈り** (公開)
メッセージ：武藤謙一 首座主教
16:00～ **講演** (公開)
講師：片岡輝美氏
(会津放射能情報センター代表)

5月31日(月)

- 08:30～ 朝の黙想
09:00～ **フォーラム1**
「教会とエネルギー」
10:00～ グループ毎の自由な話し合い①
11:00～ 全体への分ち合いとまとめ①

15:00～ **フォーラム2**
「核のゴミ」「原発事故」
16:25～ グループ毎の自由な話し合い②-1

19:00～ グループ毎の自由な話し合い②-2
19:30～ **分かち合い**
「私たちの教区、教会の姿」
21:00～ コンプリング

6月1日(火)

- 08:30～ 朝の黙想
09:00～ 全体への分かち合いとまとめ②
09:30～ 前半のまとめと後半に向けて
10:00～ 前半閉会の祈り、解散

<後半プログラム>

6月6日(日) 地球環境のために祈る日

- 17:00～ **地球環境のための祈り**
前半の質問への応答
17:10～ **フォーラム3**
「再生可能エネルギーの活用」
17:30～ グループ毎の自由な話し合い③
18:30～ 全体への分ち合いとまとめ③

6月7日(月)

- 08:30～ 朝の黙想
09:00～ **フォーラム4**
「私たちに出来ること。
私たちの責任」
09:30～ グループ毎の自由な話し合い④
10:45～ 全体への分ち合いとまとめ④

15:00～ **フォーラム5**
「私たちの教区・教会での働き」
15:20～ **事例紹介：おひさまプロジェクト**
松山健作司祭
15:50～ グループ毎の自由な話し合い⑤
17:00～ 全体への分ち合いとまとめ⑤

19:00～ **閉会礼拝**
メッセージ：正義と平和委員長・
上原榮正主教
19:45 解散

5. 公開講演会

「考えること悩むことは、いのちに向き合うこと～福島からのメッセージ」

2021 年 5 月 30 日（日）16 時～18 時

講師：片岡 輝美 さん

会津放射能情報センター 代表。宗教者が核燃料サイクル事業廃止を求める裁判 原告・事務局。これ以上海を汚すな!市民会議 メンバー。子ども脱被ばく裁判の会 共同代表。

講演内容：（講演当日のレジュメから抜粋。全文は原発問題プロジェクト Web サイトに掲載。）

- ◆ 2011 年 3 月 11 日午後 7 時 3 分、原子力緊急事態宣言発令
核事故直後から起きたのは、「情報」と「基準」のコントロール、そして「安心安全キャンペーン」
- ◆ 会津放射能情報センターの働き
「どのいのちも大切にするために、本当に重要なことを見分けるために、
事実を知る力と真実を見抜く力を身に着けること（フィリピの信徒への手紙 1:9～10）」
活動の柱① 数値の収集と情報の発信「安全を確認するために測定を続け、情報を共有する」
活動の柱② 人の思いに寄り添う 「いのちを守るために私たちはつながる」
- ◆ 報道で見る福島は今
2021/01/26 ANN news 格納容器上部が高濃度汚染 福島第 1 原発 2、3 号機
2021/01/28 河北新報 大熊の新校舎 子ども達の夢を形に ワークショップで意見を聞く
2021/01/31 福島民報 県と各自治体の避難者数に開き
2021/03/26 週刊金曜日 3・11 から 10 年 臨床現場からかけ離れた「過剰診断」「検証縮小」論
2021/05/11 朝日新聞・耕論 合意なき海洋放出
- ◆ 核事故被害を「見えない化・見せない化」する国 ～「原発安全神話」から「放射能安心神話」へ
・飯舘村、汚染土の再利用実証実験で食用野菜を栽培、除染無しで解除へ
・全国・海外に広がる放射線安全教育…若者の原発見学や文科省「放射線副読本」の配布
・避難区域解除と賠償打ち切りで帰還と自立が迫られ、福島県に裁判で訴えられる避難者
・語り部に真実を語らせない「原子力災害伝承館」
・米国・ハンフォード核施設をモデルに、大企業を誘致し、教育研究拠点をつくるイノベーション・コースト構想
・伊達市「個人線量データ」無断使用問題、放射能ゴミ焼却問題 その他にも、課題問題は山積...
- ◆ 本音を言い、強硬的な決定を行なう国や福島県、司法に対し、私たちの声を届ける！
・原子力規制委員会の「モニタリングポスト 2400 台の撤去方針」を、市民の声が阻止

- ・汚染水海洋放出の撤回を求める声は国内外で広がっている
- ・子ども脱被ばく裁判:2014年8月福島地裁に提訴、2021年3月1日不当判決を受け、仙台高裁へ控訴
- ・宗教者が核燃料サイクル事業の廃止を求める裁判(宗教者核燃裁判):2020年3月、東京地裁に提訴

◆ 私たちの権利を取り戻す

日本国憲法第25条「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」
2項「国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」

第12条「この憲法が国民に保障する自由と権利は国民の不断の努力によってこれを保持しなければならない」

◆ 考えること悩むことは、いのちに向き合うこと

私たちは放射能を怖がる無知な母親なのか？ 不安になること、怒ることは悪いことなのか？
安心安全キャンペーンと科学者のパターンナリズム

◆ 主に喜ばれる生き方を吟味する（吟味する…よく調べて選び取ること。）

「何が主に喜ばれるかを吟味しなさい。」（エフェソの信徒への手紙 5章 10節）

「人よ、何が善であり、主が何をあなたに求めているかは、あなたに告げられている。正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである。」（ミカ書 6章 8節）

◆ 東電福島第一原発核事故の真実を知るために…、核のない未来を築くために…

文献・メディア紹介

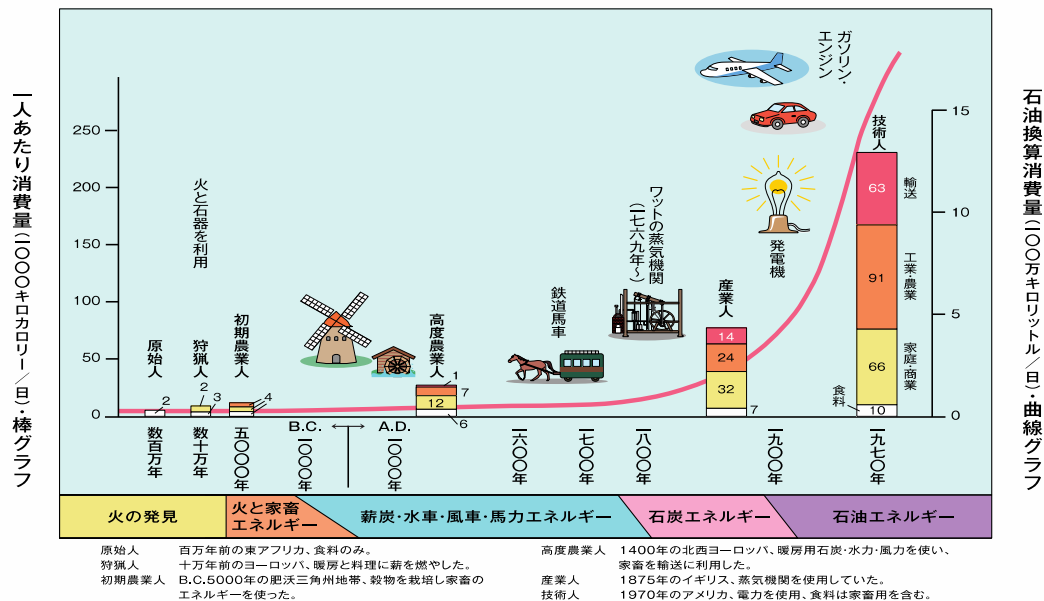
片岡輝美さんの講演を通して参加者は原発事故から10年の現実と向き合うこととなりました。福島原発事故がその発生から現在、また将来も子どもを含む多くの人々の健康、生活に不安や影響を及ぼすこと、また、その出来事が見えなくされていることが示されました。いのちを守る選択をするために行動をする方々の姿や、信仰者として生きる片岡さんの言葉は、なぜ教会が原発の問題を考え続けるのか、「いのち」をみつめる視点を改めて提示してくださいました。

- ・片岡さんの思いの根底にあるものが、子どもたちの命を守りたい、守らなければならないという使命感だと受け取った。命の大切さを自分達のこととして伝えていかなければならない。
- ・片岡さんの信仰者としての生き方を通して、自分はどうか、次の世代に何を残して死ぬのかという、信仰的な責任とそれに必要な勇気に気づかされた。
- ・政治決定とは離れた場所にいた女性達が、子どもを守りたい普通の母親として声をあげ、自己決定権を求め立ち上がっている。誰かに任せるのではなく、一人一人の意思表示が大事だと思う。

これらは参加者から共有された講演を聴いての気づきや感想です。片岡さんの言葉に突き動かされながら参加者全員が共に考え悩むことを受け入れ、その後のプログラムへと繋がっていきました。

6. フォーラム 1「教会とエネルギー」

人類とエネルギーのかかわり



発題の概要

現代に生きる私たちの生活は、エネルギーの恩恵なしには 1 日たりとも成り立たず、あらゆる領域において必要欠くべからざるものであることが前提条件となっている。しかし、エネルギーは今や、それだけでなく、その持続性を危うくするものでもある。それは、18 世紀後半(1769 年)産業革命の引き金ともなった蒸気機関の発明により動力としての利用が可能になり、工場生産やその規模の拡大が進められ、更に、内燃機関の開発は自動車の開発と人や物資の移動・輸送に利用されるようになった。そのようにして経済活動の発展は人々の生活を衛生的で快適なものとし、人口の増加が需要と供給の拡大をもたらしてきた。

電気エネルギーは水力発電から火力発電へと推移し、燃料も石炭、石油、天然ガスなど多様になった。そして、エネルギー資源に乏しい日本では、太平洋戦争の後、核分裂エネルギーを利用した原子力発電の開発へと進められ、2011 年 3 月の東日本大震災の時点で、54 基の原発が稼働し、電源構成で約 28%に達していた。

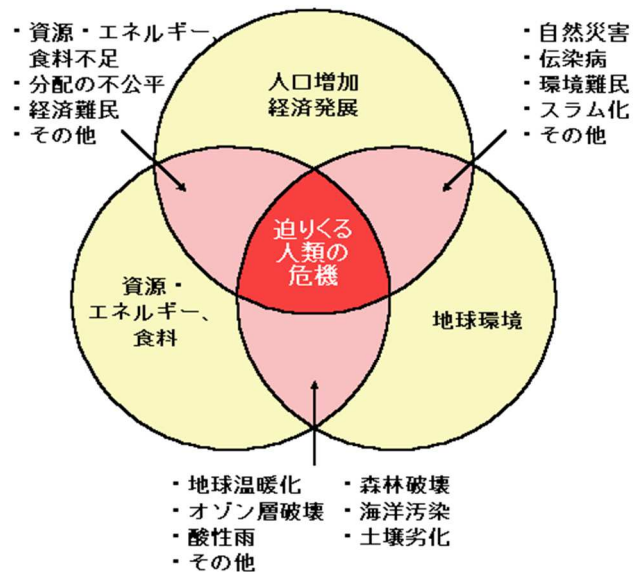


図6 トリレンマ問題の構造

【出典】電力中央研究所(編):次世代エネルギー構想-このままでは資源が枯渇する-、電力新報社(1998年10月) p.53

しかし、2011年3月11日に東北福島県沖を震源とするマグニチュード9.0の巨大地震と巨大津波は、東京電力福島第一原子力発電所を襲い、運転中の1～3号機の緊急停止、外部電源の遮断、緊急炉心冷却ポンプの停止、それによる炉心温度の上昇と燃料棒溶融、水蒸気分解による水素の発生、ベントの失敗による水素濃度の上昇と漏洩、そして爆発という過酷度7の事故を起こした。化石燃料発電所は温室効果ガスを排出する事で、地球温暖化を防止するためには減少の必要がある。

ドイツは福島原発の事故を目の当たりにして、2011年のうちに2022年には全ての原発を停止することを決めた。また、化石燃料火力発電所の計画的削減も決めた。私たちはこのような状況の中にあり、これらの問題は、政治、経済の問題であると同時に、全ての人間の「いのち」の問題である。キリスト者である私たちは、そして教会はエネルギーとどのように向き合っていかなければならないのであろうか。

ドイツ・倫理委員会のレポートの内容

- 原子力発電所の安全性は高くても、事故を無くする事は出来ない
- 事故になった場合はほかのどんなエネルギー源よりも危険である
- 次の世代に廃棄物処理などを残すのは倫理的問題がある
- 原子力より安全なエネルギー源がある
- 地球温暖化問題もあるので化石燃料を使うことは解決策ではない
- 再生可能エネルギー普及とエネルギー効率性政策で原子力を段階的にゼロにしていけることは将来の経済のためにも大きなチャンスになる

(ミランダさんの講演の原文のまま)

問いかけ：(参考として、以下の問いかけをもとに分かち合いが持たれました。)

- ① 私たちにとってエネルギーとは何か
- ② エネルギーは私たちに何をもたらしているのか
- ③ エネルギーは私たちの信仰とどのような接点（関係）があるか
- ④ 信仰生活とエネルギー（問題）

6 グループの分かち合いから（順不同にピックアップしました。）

- 10年前の3月11日、「大変なことが起こり、原発がなくなればよい」と思った。国民的合意があったはず。しかし、今、地球温暖化政策などを見ると原発回帰している。
- 原子力村の相関関係図を見て、癒着などに立ち向かうのは大変。
- 当事者意識を持つことが大切。広島・長崎の原爆の被爆者の立場を想像すること、今も原発事故の被害を受けている人を思うイメージーションが大切。
- 信徒としてどう生きるのかが問われている。必要以上にいろいろなものを欲しがり、原発に反対する矛盾。
- 貧困と原発は切り離せない。
- いのちの連帯、ネットワークの中で認識を深めていく。
- （パワーシフトに関し）核に繋がっていないエネルギーを使うように教区に呼びかけた。
- 教会が声を出していくことは大事である。教会で脱原発や環境に個人として取り組むことはわかるけれども、教区として決議することではないのではないか、と言う声があり、主教も苦しい思いをしていると言われている。この疑問にどう答えていけるのか、と言う

ことも大切なことだと思う。九州に関して言えば、広島と同じように長崎も被爆地なので、礼拝を行なっている教会の人たちも、原発の問題に関しても核につながっていると言っていた。それで、九州教区でも、核でつながっていることとして実感した。やさしいエネルギーについて語るとき、『・・・をしなければならない』など決めつける姿勢よりは慎重にアプローチする必要がある。

- 命の尊厳を損なっている問題がある。
- 自然エネルギーでも、かえって自然破壊しているケースがある。
- 自然エネルギーの負の側面とも向き合っていかなければならない。
- 神様が創造された秩序のもとに整理されていなければならない。それが乱されていないかを考えていかなければならない。
- 再生可能エネルギーを考える時にも、自然に即した考えをもとにしなければならない。
- 近年では訂正されてきている。自然は人間が「保ち、守る」ものだと解釈されている。
- 自然と共に共生しながら「再生する」ことはむしろ出来ると考える（日本人だから）。
- 大きな世界のサイクルの中での、悪いものを生み出さないようにすること、循環を破壊しないということが、人間の倫理ではないか。
- 何を捨てるかを考えていく必要はあるのではないか。その思想を持たない限り、全ての産業が求める方向にばかり進んでいくようになる（もっともっと病）。
- 原発は伝統を破壊する。エネルギーを使えば使うほど伝統を破壊する。
- 教会に（原発問題のような）政治を持ってくるべきではないと、強く言っておられる方もいた。
- 最初から政治的な課題を是か非かで入ると議論になり、平行線になってしまうので、「間違っているかもしれないので、あなたの意見を聞かせて」という感じで話す以外にはない。
- 日本聖公会の決議もありますね。あんな決議はけしからん、と言われた方がいたと聞いたことがある。
- 説教で（原発問題に）関連した発言をすると、転籍を希望された方がいたそう。
- 教会で原発問題なんかを話すな、と言われる方もいますが、そこに、これは命の問題であって、信仰の問題であるという確信を、自分たちがどのように伝えていけるのか、ということが問われてきているのかと思う。
- 直接的に政治のことを説教台から語ったら、転籍したいという人が出るのであれば、もう少し下の基礎の部分、皆さんが生活している社会の中で（聖書や社会状況を）どう読んで生きていくのか、というレベルで話をしないと、いつまでたっても平行線で終わってしまうのではないかと思います。
- 片岡さんは、子どもたちの命を守りたいという思いが根底にあった気がする。政府に対して言っていかなければならないということはあるけれども、根幹には命を守りたいとの思いがあり、やりたくてやっているというよりも、やらなければならないという義務感（使命感）というものが大切なのではないかと思った。根底にある命の大切さを伝えていかなければならないと思う。しかし、リアリティが持てない、どこか遠い話のような気がしていた。
- 沖縄に、若い元気のよい黒人の司祭さんが来られたのですが、その司祭さんがよくぼやいていた。沖縄では、よく「ノーベイス」「ノーレイプ」と言うプラカードが（教会）事務所に貼ってあるが、そういうものを見ると、自分は差別されていると言う。沖縄に来て米軍

の関係者であるということで差別され、黒人だということで差別されるので、二重に差別を受けていると言っていた。その一方で、すごい自信を持っている人たちもいる。米軍の偉い人たちは「俺たちがいなかったら中国が攻めてくるよ。俺たちがいなければ日本も沖縄もダメなのだ。どうしてそれが出て行けなんて言われるのだ」と言う、明確な価値観を持っている。そこまで言われると「そうですか」と聞くしかない。それから先、「でも・・・」と言って何を話すかが問題ですが、言わなければいけないことは言わなければならない。

- 命の問題と言うと、抽象的な感じがしてよくわからないが、生き方の問題ではないのかと思う。60年以上生きてきて、エネルギーがない田舎で育った時との幸せと今、エネルギーはたくさんあるけれども、それで幸せかどうかと言われると全然違って、生き方そのものの問題として考えてみると、価値観でそんなに違ってこないのではないと思う。
- 何にしても受肉していないとダメで、正義と平和も自分のものとして入ってしまうとライフスタイルも変わり、語る言葉も変わってくる。だから、対立関係になると厄介になるのだが、そのレベルまで落とし込んで行くプロセスは必要だと思う。
- 原発と言うと「えっ」と言われる方も、エネルギーとか環境問題だと言うと教会の中でも話しやすいことはあるよね。生き方の問題と言っていたら、環境問題と言う話だが、山本先生と言う東大の先生が環境問題の提言の中で、生活スタイルの変化を言われている。その中で、宗教はそれを支えるものとして非常に大切だということを、3.11以前から言っている。宗教人とも対話されている方。今までいろんな革命があったが、今回のことは「第4次精神革命」と言う言い方をしていたと思うが、要するにエコロジーを視点とした回心が非常に重要で、今の時代の価値観を転換することが非常に重要だと言っていた。その中で、宗教も大切な役割を担っていると言う。その先生も3.11前は、原発は安全だから必要だと言っていたが、3.11以降は原発も事故を起こすのでダメだと言っている。生き方と言う意味では、信仰生活とエネルギー問題は非常にかかわって来るということはあるのではないかと考えた。
- 原発を推進する人たちは、原発は人間がコントロールできるエネルギーだと言われるけど、命の視点に立ったときには、本当はコントロールできないエネルギーではないかと言うこと、その理解の分かれ目が大きいかなと思っている。
- ドイツの倫理委員会は（日本と同様ドイツでも）「事故は起こりうる」ことを断定して、原発やめるという結論を出した。
- 何をやってもどこかでつながっている。そういうことの中で生活していることを自覚しなければならないと思う。
- 知らない間に、誰かの足を踏んでいるかも知れないということもある。
- 何しても、自分との関連を、「俺、知らない」というのではなく、社会で生きている以上、逃れられない問題だという認識ができると、見方が変わってくると思う。
- 「原発の問題を教区・教会でどのように話していますか？」との問いからフォーラムは始まり、政教分離、社会問題を教会に持ち込むべきではない、という意見が根強くあるとの意見があった。けれども、これは「命の問題」として捉えていくべきであり、言い換えれば、「生き方」の問題、ライフスタイルを問うていることであるとの意見で一致した。そして、自分との関連の中で、この問題を受け入れたとき、見方が変わる。沖縄の基地の問題は沖縄だけではなく、すべては自分につながっていることを意識することが大切。エネルギーは、生活することによって使用するものであり、それによって誰かが傷ついて

いるかも知れない。そうで あるならば、その人たちにも目を向けるべきである。

- システムで人や命を見るのではなく、人や命をそのまま 大事にする、神の救いを求める新しい協力や場が作られることではないか。

7. フォーラム 2

(1)「核のゴミ」

発題の概要

原発は運転すると必然的に使用済み核燃料、特に「高レベル放射性廃棄物」と呼ばれる「核のゴミ」が生じます。世界には 500 基近い原発が存在しますが、ウランの核分裂によるエネルギーを利用する原発では必ず生まれる副産物です。その中には半減期が 24000 年のプルトニウムやウランなどの放射性物質が含まれます。

日本では原発で使用した使用済み核燃料を再処理して、再利用できるプルトニウムやウランを分離しこれらを原料として MOX 燃料という新たな核燃料を作る核燃料サイクル計画があります。この計画は高速増殖炉「もんじゅ」の燃料として利用する計画でしたが、故障続きで完成しないことから廃炉処分が決定しています。また、再処理については青森県六ヶ所村再処理工場で再処理する計画ですが、これも、これまで 25 回も完成が延期されるほど故障続きで未だ完成しておりません。核燃料サイクル計画は完全に 破綻していますが、使用済み核燃料の再処理をフランスなど海外に委託して MOX 燃料を 製造しているのです。それでも使用済み核燃料は、各発電所の燃料プールと呼ばれる中間貯蔵施設に保管されていますが、保管容量が限界に近づきつつあります。また、プルトニウムは 47 トンもあるため、核兵器は持たないまでも核保有国としての大きな課題を抱えています。

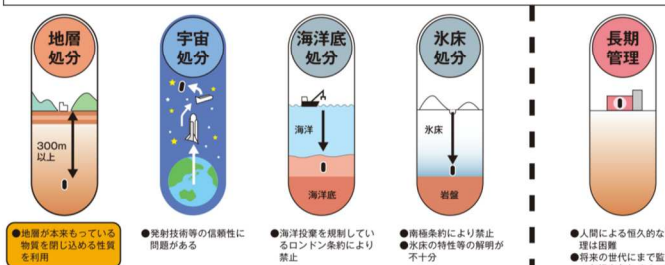
世界中にある原発の使用済み核燃料の処分方法は殆ど決まっていません。

ただ、フィンランドは最も早く処分場所を決定し、2022 年には処分を開始する予定です。

高レベル放射性廃棄物の処分方法の検討

人間による恒久的な管理の継続は困難であり、将来世代にも管理の負担を負わせることになるので、最終的には人間による管理がなくなったとしても安全に処分できる方法が検討されてきた。

- ・地層中への処分は、地下資源などが長期間保存されてきた多数の実例があり、実現可能性が高い
- ・宇宙空間への処分は、発射技術等の信頼性に問題がある
- ・海洋底の下への処分は、海洋投棄を規制しているロンドン条約により禁止されている
- ・極地の氷床への処分は、南極条約により禁止されている。また、氷床の特性解明が不十分である

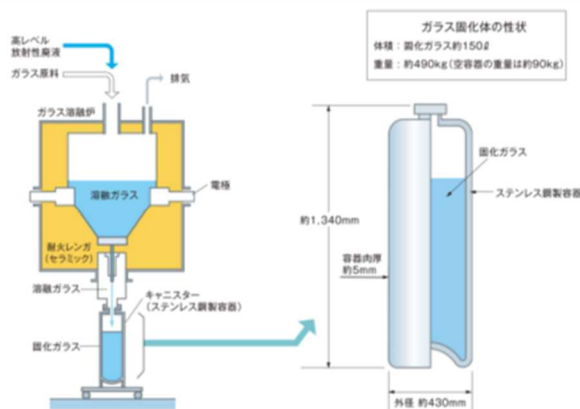


8-3-6

原子力・エネルギー図鑑

出典：原子力発電所廃止後廃棄物処理のあり方

ガラス固化体ができるまで



8-3-1

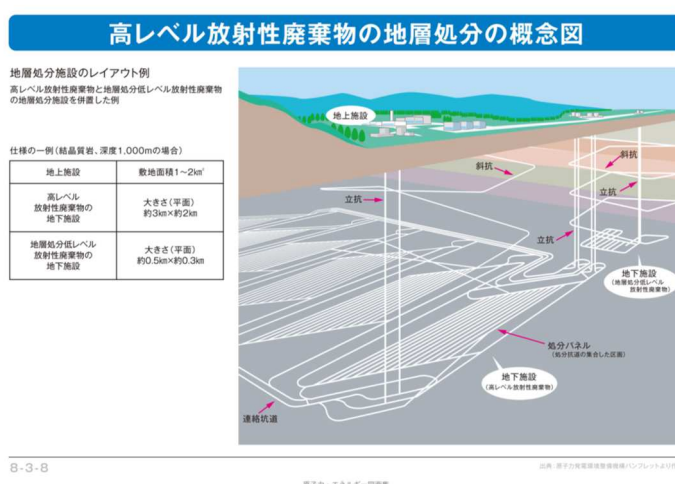
原子力・エネルギー図鑑

出典：日本原子力発電所廃止後廃棄物処理のあり方

処分方法としては地層処分が最も適当と考えられているのですが、処分地選定の段階で、反対意見も根強く、ただ、そのままにしておくことは出来ないので多くの対話が必要な状況です。日本における最終処分場の選定は、原子力発電環境整備機構(NUMO)が中心となって進めることになっています。

北海道幌延町には「幌延深地層研究センター」が2001年4月に

開所し、以来各種の地層処分に関する研究を継続しています。2028年には研究を終え埋め戻す計画ですが、地元では、なし崩し的に使用済み核燃料が搬入されることを懸念して反対運動が続いています。また、2020年8月には北海道寿都町と神恵内村が最終処分場に関する文献調査を受け入れると表明しました。これも賛否両論があり、地元自治体の住民が分断されるような状況も生まれています。



問いかけ：① 「核のゴミ」の存在をどう思うか

② 「核のゴミ」の処分方法についてどう思うか

③ 「核のゴミ」処分地をどのように選定するのが良いのか

6 グループでの分かち合いから

- 簡単に答えられるものではないし、実際に米国では陸上での保管を考えているとも聞く。10万年と言っても時間は連続しているので、次の世代に上手く伝達していくことで危険性を知らせていくことは可能だと思う。また地下深くでは酸素が少ないため腐食も少ないと考える。水脈についても地下深くではあまり問題にならないと思う。地質的な問題はあるが、活断層などが無い場所を選んでいく他ないと思う。
- 核のゴミや廃炉については、スケールが大きく途方もない時間がかかる問題であることから、どのようにタッチしていけばいいのかわからない。事故の有無に関わらず必ずある問題なので、もっと話題に上ってよいと思うし、もっと情報が欲しいと思う。
- 核分裂の研究や実験によりその威力の大きさを知った各国は、日本も含めて競って原爆の開発を行なった(日本は成功しなかった)。また当時の日本の政治家は、広島に投下された原爆のキノコ雲を遠望し、「これからの時代は原子力だ」と言ったと伝わっている。原発は科学者ではなく政治家の主導。その後の(使用済み核燃料の処分の)問題はあとから考えればよいという風潮だった。原発を持つということは、プルトニウムを持てるということでもあるから、戦争抑止力としての意味合いも強かったのではないかな。
- すでに大量にある核のゴミ処理は圧倒的に困難。どうしようもない絶望から、神さまからいただいた理性をもって這い上がるしか道はない。核を手放す決断をする。

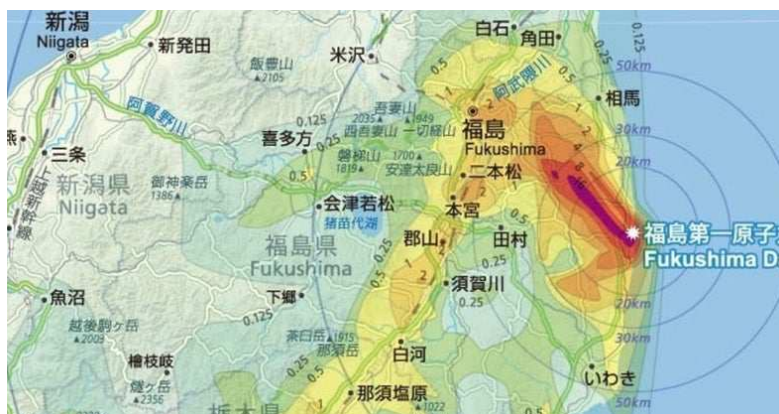
- 日本は有害廃棄物（プラスチックごみなど）を東南アジアの発展途上国へ押しつけてきた。それによって貧困にあえぐ住民に大きな健康被害が出ている。核のゴミは絶対に国外へ出してはダメ。
- 日本では、核のゴミ処分地は過疎の町（北海道・寿都）や村（北海道・神恵内）が手をあげているが、交付金目当て？
- 原発は「トイレの無いマンション」と喩えられる。長野県、千曲川の氾濫によって町中の下水が逆流した時も、マンションの住人はトイレを使い続けた。町はアンモニアの刺激臭に満ち、道路には汚物があふれ出ている。放射能は目に見えず無臭だが、排泄物の中で生活することのリアリティを感じる必要があるのではないか。
- 地下に埋めて 10 万年管理し続ける、モニタリングを続けるというイメージだったが、尾関さんの説明では 60 年後は放っておくということだったように思うが、そのように考えられているのだろうか。
- 運転を続ける以上はゴミを出し続けるのだから、とにかく運転をやめるべき、ということだとは思ふ。
- ガラス固化体は再処理施設の完成が前提だが、日本ではできる見込みがないのでは？ 低レベルのものの処理について、どれだけ研究され、議論されているのかを知りたい。
- 核燃サイクルそのものが破綻しているので、ガラス固化体にして処分という話は現実的になっていない。アメリカやカナダはそのまま埋める方向で進めているらしい。
- 原発が通常運転で出し続ける低レベル放射性物質については、一般市民には完全に密封されている、出していないというイメージを持っているのではないかと。
- 大阪の知事たちが汚染水を引き受けるということを度々口にしていて、とんでもない発言だが、自分に引きつけて考える機会にはなった。どこかがゴミを引き受けなければいけないという現実と向き合わなければならない。
- 沖縄以外のメンバーの所属する教区には原発があり、身近な課題である事に気づかされたが、この問題については「隠されていた」、「だまされていた」という思いがある。この原因はマスコミや政府による安全キャンペーンなどがあると考えられるが、核のはらむ問題に敏感でなかった我々自身ともいえる。
- このセミナーで、山のような核のゴミ、汚染水、労働者の服など放射能汚染された物の数々、海温上昇等、とにかく困難な問題がある事の一部を知った。また、核のゴミは核兵器に変わる危険性もあるのではないかと。
- 今の時代の人間が起こす問題。しかし将来の問題だと思って将来の人に任せて欲しいという人もいます。
- 原発や核のゴミは、変化を要する出来事として受け入れる勇気が必要。すでにある核のゴミは分け持つという責任・覚悟（当事者として）が必要ではないかと。
- 核のゴミの問題を知らせることが先ではないかと。犠牲をもたらさない安全な対策が必要。

フォーラム 2

(2)「原発事故」

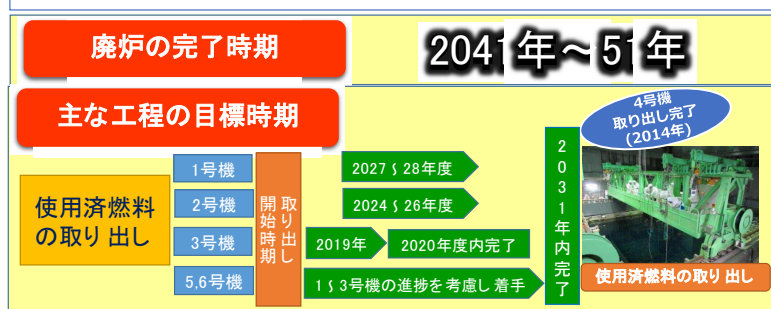
発題の概要

「原発は安全である」という「安全神話」は、2011年3月11日の東日本大震災における地震と巨大津波による東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故によって完全に崩れ去った。1986年に旧ソ連チェルノブイリ原発と同様のレベル7の事故だった。福島原発から拡散した放射能は広い地域に及び16万人以上が避難し、長年暮らしてきた土地と親しい人たちから別れなければならなかった。その時に発出された緊急事態宣言は10年以上経った現在も



中長期ロードマップ

「東京電力ホールディングス（株）福島第一原子力発電所の廃止措置等に向けた中長期ロードマップ」（中長期ロードマップ）は、福島第一原子力発電所の廃炉を進めていく上で、基本的な考え方や主要な目標工程等を政府が定めたものです。2019年12月に5回目の改訂が行われました。



まだ解除されないままである。そして4万2千人を越える人々（2020年7月）がまだ避難生活を余儀なくされている。爆発し、原子炉がメルトダウンやメルトスルーした福島第一原発の廃炉作業は困難を極めており、作業の中長期ロードマップはこれまで5回の改訂がなされている。現在、ようやく溶け落ちた燃料棒（デブリ）の状況が見えてきたところである。近くに数十秒いるだけで死にいたる程の、極めて高い放射能の狭い環境でデブリを除去する手段が無いため、全てが新しい方法や装置の開発から始めなければならない。今後の見通しは全く明らかなではない。放出され、広範な地域に拡散した放射性物質は、除染作業により地表面を削ってフレコンバッグに詰められ、各地に設けられた仮置き場に集められたが、そこからの行き場が無い状態である。フレコンバッグは時間が経過するとともに劣化し、中の植物が成長して袋を破り、そこから雨水が侵入したり、漏れ出した水が付近を再汚染したりするなどの恐れが生じている。

また、1999年に核燃料加工会社 JCO 東海事業所にて、濃縮ウラン溶液を本来の用途と異なる「沈殿槽」に大量投入したところ臨界が発生。作業員3人が大量被曝し、うち2人が死亡する事故が発生した。原子力施設の事故による急性放射線障害で犠牲者が出たのは国内初。臨界は20時間持続し、救助に当たった消防隊員や周辺住民ら667人が被曝した。この事故は、過酷度レベル4であるが、世界の原子力10大事故の中で9番目に位置付けられている。原子力発電所の原子炉には原子爆弾の何十倍もの核物質が燃料として装架されているため、事故発生によって生じる放射性物質も膨大な量となる。それらが拡散することによって広範な地域が汚染される。汚染された地域は長期間にわたって被曝の心配を抱えることになるのである。

問いかけ：④ 原発事故は防げると思うか。

⑤ 原発の安全性を確保することは可能か

⑥ 原発は事故がなくても立地地域では被曝することをどう思うか

6つのグループでの話し合いから：

- 機械は必ず壊れる。人は必ず間違ふ。この単純なことを踏まえれば、過ちが起こったら取り返しのつかないことになる原発はあってはならないということが導き出される。
- 何よりも一番大切なものは「命」である。これが脱原発の原点だ。この「命」をまもることができない可能性が高い原発はあるべきではない。
- 原爆の開発、またその地上核実験によりその威力の大きさを知ることになった各国は、日本も含めて競って核の研究、原爆の開発を行っていった。また当時の日本の政治家も「これからの時代は原子力だ」という思いがあった。原発は科学者が主導で開発したのではなく、政治家の主導。その後の問題はあとから考えればよいという風潮だった。原発を持つということはプルトニウムを持てるということでもあるから、抑止力としての意味合いも強かったのではないか。
- 福島第一原子力発電所の爆発事故を含めて、これまで全ての原発事故は様々な安全性に欠け、起こるべくして起こった。本当に原発が安全ならば、恩恵を受けるべき地域に建設すればよいはず。遠隔地からの送電ロスもない。
- 受益圏と受苦圏の捉え方。立場の弱い（経済力のない）地方（受苦圏）にしわ寄せ、大きな負担を強いる社会構造。首都圏＝大都市（受益圏）は傲慢で謙虚さが足りなさすぎる！
- 神が創造された自然（生態系）が、人間が操作した核分裂（核エネルギー）によって破壊された状態。これを「悪」と捉える。
- 今ある原発を、今すぐストップすることは、経済界から大きな反発が起こることは必須。どのように停止するか。バランスを考えて段階的に停止するのがよいと思うが、その時間的スケールはどれ位にしたらよいのか？
- 東北・女川原発の再稼働反対署名を市に提出したが、不認可であった。市民の意見がなかなか受け入れてもらえない。
- 福島原発事故後、命を蔑ろにする政策がとられていると感じる一方、故郷に帰りたと思う人がいる。「危ないから帰らないで」と声をあげたいが、遠く離れている自分が言っただけのよいのかとの葛藤がある。しかし、私たち被造物の生命は神から与っている命。「いのち」の問題と直結している。
- 見切り発車は原発に限ったことではない、と論じられる。しかし、この問題は大きすぎる問題で、自分は納得できなかった。
- 分からないことについて誠実に捉えることを止めてしまっている、という点で、教会で往々にして見られる「楽観主義的」態度に似ているように思われる。危険なことに対する誠実さが必要だと思われる。
- JOC の事故については NHK が出版した記録があるが、ひしゃくで移し替えるという考えがたい作業中の事故だった。福井でも割と頻繁に事故は起こっている。原発は大気と海に放射性物質を微量に垂れ流している。住民は低線量被曝をしているのではないかと思うが、把握されていない。

- ドイツで止められたことを何故日本で止められないのか。廃炉の費用等について、政府が出しているデータは信用できるのか。考えられるシナリオ毎にコストを把握しておきたい。
- 大阪は、福島原発廃炉の作業員の供給地になっている。人生に困っている方が教会を訪ねてくるが、自暴自棄になっていて自分も他人も傷つけてしまう状態になっているように見受けられる人がいる。原発廃炉の仕事に就く、というのは、そういう選択肢になっているようにも思われる。
- 原発が止められないのは、政治や経済などの世の流れに安易に乗ってきた事による。オール電化の家に魅せられてしまう上昇志向の人々の問題がある。
- こんな状況に対し、「どうしたらよいの?」「しかたがない」と困惑を覚えつつも、目をさましつづける他ない。ひょっとすると環境に敏感な若い人達の意識は異なるかも知れない。必ず、できる事や希望もあるのだと信じたい。
- チェルノブイリ原発事故、その時の苦しみだけではなく、ずっと続く苦しみ。
- 現地の人は風向きを気にする状況。
- 国がどう考えているか。これからも犠牲者が出るのではないかと恐ろしい。
- 地元の住民を犠牲にすることがよいことか。
- 今の時代の人間が起こす問題。しかし将来の問題だと思って、将来の人にまかせて欲しい、という人もいる。
- 原発や核のゴミは、(人間に) 変化を要求する出来事として受け入れる勇気が必要。
- 次の世代の為に準備することは信仰的な謙遜や勇気が必要。
- 弱者に転嫁させる仕組みが問題。沖縄県内にもそのような問題がたくさんある。
- 自身の問題として考えるべき。

8. フォーラム 3「再生可能エネルギーの活用」

発題の概要：

火力、原子力発電のそれぞれの問題点が明らかになってきた。今後の私たちの「いのち」の尊厳性を守り、クリーンで安全なエネルギー資源として、再生可能エネルギーの活用が期待されている。中でも、太陽光発電と風力発電は、技術的にも最も有望であり、既に各地にて建設されているものである。ドイツは

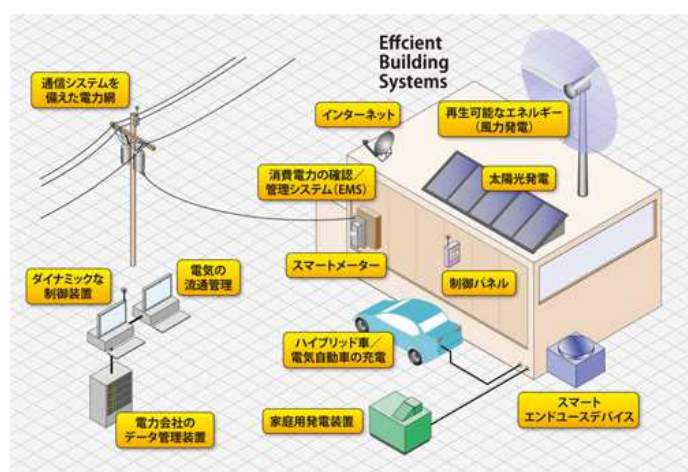
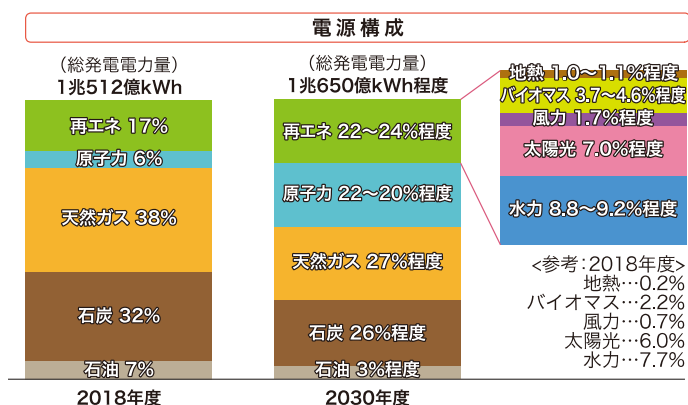
ドイツのエネルギー政策展開

- 原子力の段階的廃止
- 再生可能エネルギーの段階的導入
- 石炭火力を段階的に廃止する
- 目標：低炭素、手頃なエネルギー、持続可能な雇用、持続可能な生産と消費

2011 年 4 月に 17 人の社会の代表者からなる通称「倫理委員会」を立ち上げ、9 月には、再生可能エネルギーの普及を柱に、2022 年には全ての原発を段階的にゼロにする決定をした。また、化石燃料を用いる火力発電も地球温暖化問題があるので低減を図ってゆくというエネルギー政策の転換を決めた。これに対して日本は 2030 年の電源構成として、再生可能エネルギーは 22~25%、残りは原子力 22~20%、天然ガス 27%、石炭 26%、石油 3%と相変わらず原子力、火力の比率は大きく考えている。電源構成の計画の中には色々な判断が含まれる

だろう。相変わらず原子力をベースロード電源として再稼働を図ろうとしている。電力会社は相変わらず発電と送配電事業を分離しないので、再生可能エネルギーの発電事業は参入が抑制されているように思われる。2018年9月、北海道はM6.7の胆振東部地震に見舞われ、北海道電力管内全域が停電するというブラックアウトを経験した。これはまさに集中型の電源と配電システムの脆弱性がもたらしたものであった。現在、技術の発展とともに、再生可能エネルギーによる多くの分散型電源を、需要と供給のバランスをとりながら柔軟に制御する技術が開発されている。

太陽光発電や洋上風力発電、地熱発電などの特徴を活かしつつ安定した電力供給を確保することは可能となってきた。そしてこれら全体を包括した考え方がSDGsに集約されている。



出典：米国家電力中央研究所

- 問いかけ：**
- ① 私たちは再生可能エネルギーのみに頼ることができるか
 - ② 地球環境の改善（特に気候温暖化防止）についてどう思うか
 - ③ 今後のエネルギー政策への期待は

6つのグループでの話し合いから：

- 人によっては生活スタイルが違っていたり、会社や事業などでは電力に頼って経済が成り立っている。そのため経済が安定していないとなかなか難しい問題ではないかと思っている。
- 再生可能エネルギーを増やすという方向性と、エネルギーの使用を減らしていくという両方の実施が必要であろう。このままのエネルギーの使い方ではいくら造っても追いつかないので、個人のレベルだけではなく、事業者なども含め、今後の自分たちの生活の仕方を変えていかなければならない。また、CO2の削減が必要と同時に、どうやってCO2を吸収することができるのかという両方の視点が必要になろう。
- 風力などに積極的に投資している会社が、原発に投資している会社と重なるということも2019年の際にも話題になった。省エネをどのようにしていくかということを中心に据えながら、再生可能エネルギーにシフトしていくという、両輪が必要になっていく。

- なかなかすべてが良いということにならない時においても、いのちと人間の尊厳、自然の保全などの包括的な視点が重要になるう。
- 送電と発電を同じ会社が担っていることによって、小さい電力会社の参入が困難になる。ピークがある電力に対して、大手電力会社が十分電力を供給しているので、これ以上は必要ないとなった時に、真っ先に切られるのは小さい電力会社となる。そのようなリスクを背負わせないためにも、送電と発電の分離ということは今後検討されるべき。送配電分離の技術は、ドイツは非常に進んでいる。日本は電力会社が強いので、ドイツのようになかなかないが、何とかして、そちらの方に大きく舵を切ってもらいたいと願う。
- 日本の電源構成からすると、2030 年の予測でも再エネ化が足りていない。ドイツのように、徐々に石炭・火力の割合を下げていくしかないのでは。完全に再エネのみで 100%は遠く感じる。風力で比較すれば、洋上風力発電の方が環境負荷は少ないように思う。
- ドイツの倫理委員会には宗教者も含む幅広いメンバーが入っている。日本では考えにくいことが実現していると感じた。命、倫理に関わる問題なので、日本でもそうした議論の場に宗教家が入って、コミュニケーションを取ることは重要なのでは。
- ドイツは市民の中に「民主主義のためには様々な人の声が必要」という強い意識がある。日本は、なかなか市民の思いが政治に届かない。
- 日本でも、エネルギーシフトのために社会資本の前倒しの投資が必要なのでは。政治の問題である。(ドイツは、再エネへの投資額が年間 100 億ユーロを超える。)
- エネルギーシフトは経済効果を生む (2018 年のミランダさんの講演)。ドイツでも地方の雇用を生んでいる。日本における脱原発の世論形成の 1 つのキーになるのでは。
- 政治・産業界の問題が大きいと感じる。解決するには、やる気だけではなく、相当な覚悟と力が必要になる。もはや技術論でもなく、経済論でもない。「日本という社会がどうあるべきか」ということを論じないと、脱原発といっても大きく響かないのでは、と虚しく感じる部分もある。
- 市民として為政者へ圧力をかけ続けること、例えば投票などで意思表示をしていくことは欠かせない。
- 日本は、オリンピックもそうだが市民が怒りを爆発させていない。声を上げない、一市民としての弱さ・虚しさが先に立ってしまう。
- 個人の選択、自治体、産業（民間企業）の選択。
- 省エネこそ最大の電源。
- 再エネに前向きな選択をした自治体・産業を応援してく姿勢も重要。
- すでにスモールグリッド、地域単位での電力確保に動いているところもある。
- 人間の欲望や貪りの心が加われば、どんなエネルギーを使っても問題が起きるのではない。どんなシステムで、どんな価値観でエネルギー問題と向き合うのかが問われている。
- 人の欲望と今の社会の在り方、生活とのバランスを取りながら移行することが必要になってくる。それには、準備や時間が必要。
- 再生可能エネルギーにすれば改善されるかといえ、現実には非常に難しいのではない。
- 電気を使わない生活ができない現代。電気自動車は結局多くの電力を必要とすることになる。
- 意思表示をする（電力会社を変えるなど。今のシステムに飲み込まれないで自分で考える）ことを積み重ねていく。

- 自分でいろんなことに取り組む。たとえば蓄電池を購入し、どれくらいの家電が使えるか試している。
- 蓄電池の利用は災害時にも有効。自分で試して情報収集し発信するのは良いアイデア。
- それぞれの家庭や教会で、太陽光パネルや羽のない風力発電など、ある程度の自給自足を考える。
- 再生可能エネルギーへの転換を、電気代の節約などの視点で考えるのではなく、設備投資などコストがかかることも覚悟して、痛みを伴ってもシフトすることが大切。
- 子どもたちに電気のない生活を体験させるなど、身近な所で自分にできる工夫をしてみる。
- 原発使用は無謀であり、すでに破綻している。それに比べれば、再生可能エネルギーの発電はマシ。
- 確かに再生可能エネルギーの促進は必要。しかし、再生可能エネルギー設備の設置に必要なエネルギーの問題（矛盾）も考える必要。
- また、再生可能エネルギーもいいが、非電化のエネルギーも検討したい。そもそも電気は高級品では。
- 一方、再生可能エネルギーの促進などだけでは原発は止まらなくとも考えておくべき。私達（教会）の限られた力で、一緒に取り組みたい課題は何だろうか。
- エネルギーの自己決定権、地方自治化をしない限り、何も変わらない。どこで作られているかが見えない状態。
- 自分の地域で、エネルギーを使うために何を犠牲にしているかが見えてくれば、変わってくる。
- 日本は先進国が同じ生活だと思っている。たとえばヨーロッパは街全体が暗い。そう考えるとエネルギーの総量は簡単に減らせる。
- 一方で、電力は、個々人のライフスタイルというよりも、産業界の要求で政策が決定されているという感じがする。
- どんな所に教会としてフォーカスしていけるかが大事だと思った。また、決定権の問題（地方自治）もとても重要に感じた。自分たちの生活に関わる物事を決定する権利を大事にしたい。送電線も本来は市民のもの。
- 再エネ事業者でも内容は様々。電源構成や発電産地がわからないような事業者もある。自然を破壊する再エネ事業者も。注意して事業者を選ぶ必要。教会の場合、法人だとなかなか小規模の再エネ事業者と契約できない。良質な事業者と実際に契約できている所があったら共有して欲しい。
- また、電力利用に関して、関連法人も含めて倫理ガイドラインを作ってもいいのでは。
- 沖縄では台風で風力のプロペラが壊れたことがある。山梨では、メガソーラーは森林を拓くため水に弱くなる等、環境問題を生んでいる。中国はメガパネルのために森林破壊があり少数民族が追いやられる。洋上風力発電もまた低周波振動が海中を伝わりクジラ等への影響が心配されている。
- また、ソーラーパネルは材料のシリコンが安価な中国からの輸入が多く、ウイグル自治区の人権問題も話題になっている。再エネの発電コストがどんどん安くなっているのが普及が進むといわれているが、適正価格か疑問も。単純に再エネに移行すればいいと言えない複雑さを感じる。

- 日本はどうすればいいのか。分散・小規模・グリッドの柔軟性などがキーでは。小規模水力発電も注目されている。ソーラーも農場と併設するなどの工夫が取り組まれている。地域の特色を生かしたそれぞれのやり方を追求していくことで、原発に依存せずにやっていけるのではないか。この問題は資本の理論では解決していかないと思う。また個人や教会での取り組みだけでなく、社会のシステムとして、こうありたいという私達の思いを政策に反映させていくことが必要。
- ドイツでは脱原発の議論を技術ではなく「倫理」から考えるところ、原発に利害関係のある人を入れていないところ、民主的に決断されているところにすごさを感じた。日本では経済的視点が優先される。
- 教区内のいくつかの教会でミランダさんの講演 DVD を見た。脱原発と脱炭素を同時に進めていることに力をもらった。一方で SDG s の取り組みが進んでいる北欧の 2 か国が脱原発でないことは気になる。廃棄物施設の準備も進んでいて日本とは比較できないが。
- 廃炉も重要な仕事で産業である、といったドイツの視点はどこから出るだろう。脱原発の過程でもちゃんと地域の経済につながるという発想は重要。沖縄基地問題にも繋がるか。
- 車のエネルギーの対策が、今手に負える、目に見える対策ではないか。
- 省エネになる商品、エネルギーを選ぶ機会があるシステムを作ること。
- 自然エネルギー・再生可能エネルギーは地域の人、自分たちが主体的に作って、管理していくもの。中間集団が重要（宗教団体、教会、自治体）。
- パラダイムシフトに直面して、私たちが能動的に、主体的に悩み、取り組んでいくという生き方、考え方が必要。
- （自然破壊が）回復できない状況になることが心配（回復可能な今、積極的に対応していくべき）。
- 自然エネルギーは地域の人々が作るものになる。
- 食糧の問題にもつながっている（食糧になるまでのエネルギー効率がよくないことの改選）。

9. フォーラム 4「私たちに出来ること。私たちの責任」

発題の概要：

原子力発電に関する問題はどれも大きく、私たちにとって、全体的な理解を得ることやそれに基づいて問題点を指摘し、解決策を見出すことは困難が多い。しかし、「核といのちは共存できない」と考える私たちはキリスト者として「いのちの尊厳を守る」為に考え、行動することが要求されている。

その為もう一度、「原発は私たちに何をもたらしたか」を考えてみたい。勿論、原発をベースロード電源とすることにより、安定的で良質の電力が供給された事は評価すべきものであろう。しかし一方で経済的に、政治的に、文化的に、倫理的に多くの問題点がもたらされた。しかし、それらの問題点は、原発立地自治体には交付金という財政支援を受ける立場から、なかなか顕在化し難い状況にあったのではないだろうか。

原発は過疎地に建設される。都道府県の中核地のような人口密集地には設置されない。

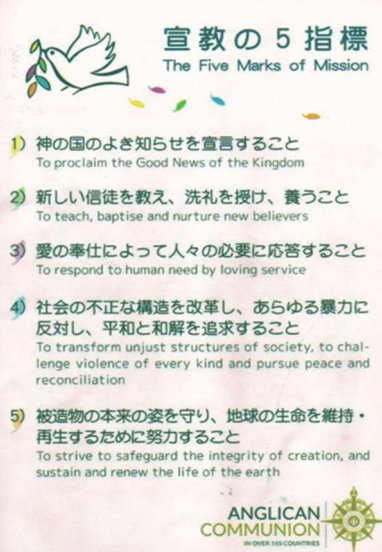
そして電力の需要が大きい地域に送られ消費される。過疎地の自治体は人口減少と高齢化が進み、財政的にも苦しくなる。そこで、原発を設置する代わりに見返りとして交付金を与え、財政支援を行なう仕組みである。しかしこの仕組みは、受益圏（電力供給を受ける大都市圏）と受苦圏（発電所を設置した過疎自治体）に分断しただけであるとの批判も

1 貧困をなくそう	7 エネルギーをみんなに	13 気候変動に具体的な対策を
2 飢餓をゼロに	8 働きがいも経済成長も	14 海の豊かさを守ろう
3 すべての人に健康と福祉を	9 産業と技術革新の基盤をつくろう	15 陸の豊かさを守ろう
4 質の高い教育をみんなに	10 人や国の不平等をなくそう	16 平和と公正をすべての人に
5 ジェンダー平等を実現しよう	11 住み続けられるまちづくり	17 パートナーシップで目標を達成
6 安全な水とトイレを世界中に	12 つくる責任つかう責任	気になるゴールは？

SDGs に示された 17 項目

生まれた。この構図の中で、将来の電源構成のあるべき姿を模索したり、「核のゴミ」処分方法を決めることには困難が多いと認識されつつある。今や私たちの生活は、電気の恩恵なしには成り立たないのである。一方、電気を生み出す原発は、一旦事故が発生すれば近隣の全ての人々がそのいのちの危機に晒される。私たちは「いのちと核は共存できない」「核はいのちの尊厳を破壊する」ことに気が付いたのである。キリスト者にとって、ここに立って発言し、行動することが求められているのである。従って、これは決して政治や経済の問題ではなく「いのち」の問題なのである。

まさに、「宣教の 5 指標」の 5 番目に「被造物の本来の姿を守り、地球の生命を維持・再生するために努力すること」であり、働きの全体は SDGs の 17 項目を実現することにつながるであろう。



宣教の 5 指標
The Five Marks of Mission

- 1 神の国のよき知らせを宣言すること
To proclaim the Good News of the Kingdom
- 2 新しい信徒を教え、洗礼を授け、養うこと
To teach, baptise and nurture new believers
- 3 愛の奉仕によって人々の必要に応答すること
To respond to human need by loving service
- 4 社会の不正な構造を改革し、あらゆる暴力に反対し、平和と和解を追求すること
To transform unjust structures of society, to challenge violence of every kind and pursue peace and reconciliation
- 5 被造物の本来の姿を守り、地球の生命を維持・再生するために努力すること
To strive to safeguard the integrity of creation, and sustain and renew the life of the earth

ANGLICAN COMMUNION
IN OVER 165 COUNTRIES



教会の 5 要素

Listening to, and Propagating the Word (Kerygma)
Responding to, and Serving the Needs of the World and Society (Deaconia)
Giving Testimony to the Gospel in Concrete Terms in our Life (Martyria)
Praying and Worshipping (Leiturgia)
Becoming a Communion in our Lord (Koinonia)

クリスチア
み言葉に働き、伝えること
ディアコニア
世界、社会の必要に応え伝えること
マルトリリア
生活の中で福音を具体的に証しすること
leiturgia
祈り、礼拝すること
koinonia
主にある交わり、共同体となること

2012年日本聖公会宣教協議会
「宣教と教会の十年」提言

日本聖公会
2016年

- 問いかけ：① 「いのち」の尊厳とは何か
- ② 「原発」と「いのち」
- ③ 原発のない世界は実現できるか
- ④ 私たち（キリスト者）の責任とは

6 グループでの話し合いから

- 「できること」「責任」を考えることに向けて、今回のフォーラムは今後のきっかけになっていくと思う。

- 「日本人は、なぜ核が好き（依存）？」という言葉が、心に刺さった。
- 核反対の政治家を中央へ送ることを意識したく（核賛成派への投票は、間接的に核反対していないことにも通じる）、選挙の際の優先順位を自分にできることのひとつとしたい。
- 具体的行動は、政治と無縁ではないはずであり、誰を選ぶかも熟考したい。
- 選挙は、生活を変えるチャンスにもなり得るであろう。
- 「キリスト者とは？」ということも考えつつ、一人一人のできることを探っていきたいとともに、これまでの考え方の転換と未来への約束も重要である。
- 原発の問題は経済力に絡められてもおり、原発を断ち切るとは価値観のシフトでもある。
- SDGs は、今や企業存在にも関連しており、受験にも取り上げられてもいるだけにチャンスにもなっていると同時に、若い世代での関心事にもなっている。
- 教会内で原発推進派は、今では少数派になっている。
- 東京教区のパワーシフト・キャンペーンは、エネルギー問題を各教会での課題、話題にしていくことを目指し、始められている。
- その他、東京教区聖マーガレット教会では、大斎節プログラムとしてプラスチック利用（環境保全）に関する大斎節カレンダーが作られている。
- できることは責任から生じるのではなかろうか。
- 教会の働きの一つに教育事業があるが、キリスト教的味わいが出されることを願うとともに、環境保全や原発のことは教育現場における課題になり得る。
- いのちのことを深めるために、リベラルアーツは大切であるとともに、そこで深めたものを総合的に用いていくことが重要である。
- 原発反対のため、共通する価値（いのち）を伝えていくことに努める。
- 電気自動車や水素利用バスが増えているが、同時に発電所は必要であり、化石燃料を利用せざるを得ないゆえに、本当の解決とは何かと悩む。しかし、自然エネルギーを増やし、電気、水素を作るエネルギーにしていけば効果は生じてくるのではなかろうか（参考：ドイツでの方法）。
- 知れば知る程に分からないことや疑問も増えてくるが、知ることはいのちを守ることに通じると思える。
- いのちを守ることは、電磁波のこと、食の問題など広範囲に及んでいる。
- 知ること、伝えること、分かち合うことのためのネットワーク作りを切望する。
- 尊厳とは、いのちが一番大切であるという根源的なことである。
- 日本人が、核の平和利用を言う。人間は人工的なものに囲まれた環境に在る。自然環境を意識して行かねばならない。人間は文化的な側面、倫理的な側面を意識して行かねばならない。
- 日本では、ヒロシマ、ナガサキの被害を受けて、だからこそ「核の平和利用」に転換して行くという「政治的対応」があったと思う。
- 平和利用とは、核兵器を利用するためにアメリカ主導で核開発が進められた。自然環境の活用、地球の環境の中で再生可能エネルギーを再利用して行く。人工的に核分裂で新たに物質を創り出すことでは無く、動いて行く。化学物質と倫理、生命倫理。技術の進歩と人間性の整理を、私自身教会の中でやって行かねばならない。便利な生活に流されてしまう。面倒くささ感と、もう後戻りが出来ないという重みを感じている。

- 教会委員の方に、すぐに原発の事を説明するのではなく、例えば SDGs の 17 項目を、各項目について毎月 1 回勉強会を持ちたい。その中に「クリーンなエネルギー」の項目の中で、原発を取り上げることができる。
- 一般的に、次第に再生可能エネルギーへシフトして行くことは可能だろうけれども、原発が本当にゼロに出来るかどうかは分からない。
- 原発の無い世界は実現できていると思っている。ドイツにできて日本でできないことはないと思う。新型風力発電等も可能だろう。今朝のグーグルニュースで、岩手県の軽米町（かるまいちょう）（人口 8000 人）で、約 130 メガワットの太陽光発電が広大な山林に設置されていることを知った。東京ドーム 30 個分。ジェノバという会社が運営し、2019 年運転を開始して、メンテナンス等で新規に 240 人の雇用を実現し、また地主等の住民に年間 1 億円の賃料を支払う事で、村の年間所得が 1.5 倍になったとのニュースが出た。原発に代わる代替エネルギーで、すごいなと思った。
- マルティン・ハイデッガーの Gelassenheit「放下」について言われた。後期ハイデッガーは古代ギリシア哲学の「自然 = physis ピュシス」に言及している。彼は真理「aletheia アレータイア」を「非隠蔽性」「露わに開けること」とする。自然の循環構造の思想の背景に、ギリシアのピュシス「生成する自然」の発想があるかも知れない。
- 廣瀬さんの「自然の循環構造」という言葉が印象に残っている。特に「循環」という言葉がキーワードである。昨日の聖書日課で、「創世記」のアダムとイブの話があった。アダムは「お前は塵に過ぎないのだから、塵に帰るのだ」と神様に言われ、服を着せてもらう。人間は土から造られ、命の息を吹き込まれて生きる。塵から出て塵に帰る。人間は「自然の中で循環する生命」である。人間は自然の中で循環する事で命を得る。その自然の循環を妨げるものは、「罪」であり「悪」である。原発や核は、その自然の循環を遮断する。だから罪深いものである。
- 「熟考」することが必要だ。学ぶ、聞くことに対して、更に我々が一步動かないといけない。教会の中で、どうやって「熟考」して行くか。100%の事は無い。オリンピックについても何故、行動の一步が出来ないのか。熟考し、議論し、意見対立を乗り越えない限り、行動に結びつかない。「和」を重んじ、波風が立たないように生活する事が求められ、対立を怖れる日本の、教会の風潮がある。また、議論していると議論を途中で打ち切ってしまう。東京教区ではパワーシフトの取り組みをしている。少しでも二酸化炭素を減らそう、CO2 を出さない生活を考えてみようという大きな問題設定の中で、原発の問題を取り込む。少しでも地球環境を考えて再生可能エネルギーを活用して行こう、という大きな課題への取り組みの中に原発を取り込むことで、反発を避ける事ができると思う。
- 「いのちの尊厳」とは何か。神様に与えられた自然の中で自分も自然として生活する。
- 神が創造された自然においてすべてのものに「いのち」があり、それを尊いものとして生きる事かと思う。
- 創世記冒頭で、神が人間を「自然を支配する者」としたのは、神が与えられた全ての被造物の「いのち」、生きとし生ける「いのち」を、人間が保全して共存して行くこと、これが「支配する」という意味だと思う。人間の尊厳がそこに在る。
- 何か整理する手立てが分かりつつあるような気がする。学校での「いじめ」、「コロナ」、それらは全て、「他者のいのち」を損なうものであり、核も同じだ。そこから守るのが「いのちの尊厳」だと思う。「コロナ」と「核」は似ている。

- グレタ・トゥーンベリさんの言動などを見て、「環境原理主義」ということを考えた。環境保全を絶対視し、自然の手入れやケアを全くしないのは、自然をより良く保全する事には繋がらない。
- 科学技術を何処まで容認して行くか。原始時代に戻るのか。そこまで戻れないのであれば、熟考の中で抑制的な生活をする事は、極端に走る原理主義とは違うと思う。
- アーミテージ。極端になり過ぎると、聖公会の楽天的な考え方には合わないが、真剣に考えない事もいけない。そのバランスをどう取って行くかが大切であろう。
- EU では、グリーンディール政策に 200 兆円の予算を掛ける。私たち一人一人が取り組まないと実現して行かない。その一人一人の小さな取り組みが全体を変える力となって行く。教会の中で、どういう話をするのか。一人一人が取り組む事として、普段の生活の中でできることから始める。例えば、①マイ箸、マイスプーン、マイフォーク②買い物袋、レジ袋、プラスチックゴミの削減など。SDGs の「作る責任」「使う責任」という「循環」構造の話では、2001 年にアメリカ人によって設立されたループ Loop という会社が、「循環するショッピング・プラットフォーム」を実現している。「捨てる」「ゴミ」を無くす、という「マテリアル・リサイクル」「再資源化」を実現している。例えば商品の「容器」の製造→販売→購入→販売元に返す、という商品の無限ループ、会社名の「ループ」は「無限大」を表す「∞」記号名である。省エネルギーと「循環」を実践している。2020 年 10 月には「ループ」の日本会社が出来た。
- FoE (NPO 法人) が東京教区の「パワーシフト・キャンペーン」に対応している。個人ではできないことも、伝えることで可能となる。太陽光発電への転換はハードルが高くても、電力会社を替えることでクリーンエネルギーの拡大に寄与できる。電力会社の選定は、「買い物は投票だ」との意識で行なう。その電力会社の事を深く調べて、大規模な自然破壊をして太陽光発電をしている会社は使わないとか、最終的にクリーンエネルギーを視野に入れた判断基準で電力会社を選定し、電力を移行して行く。また国の政策決定に対して投票行動で意思表示をするのと同じように、他の事柄に対しても、あらゆる機会を捉えて個人、地域、国のレベルで意思表示をすることを考えて行く。
- 教会での取り組みは、限られた人数での対応となるので、眼を外に向けて、市民団体、環境に関する NPO 法人、ネットワークの構築等に対しても教会の関わりを拡げて行く。原発の科学的バックグラウンドなどに関しても、互いに勉強会を開く。また個人でも市民団体などの会合に参加する等、広がりを持っていくことが必要だと思われる。
- 今まで、原発の問題に関心を寄せてこなかった。今一度、キリスト者としてこの問題に取り組まなければならない。
- コロナ禍の今だからこそ、改めていのちの大切さ、尊厳を考え、そして訴えたい。
- 戦争や暴力がなくならないように、原発もまたなくならないのではないかな。それでもなお、教会は声を上げ続ける必要がある。
- 脱核を目的とした考え、訴えを発信していくことの重要性をポイントに議論された。
- 原発に対しての日本聖公会としての立場を、様々な声明文などではっきりさせていることは、自分たちが社会に訴えを発信していきやすい。
- 私たち日本聖公会は、被爆国であり、福島原発事故の当事者として世界に発信していく責任があることを強調していく責任があるのではないかな。

- 立教大学原子炉(廃炉)が、大学と日本聖公会とアメリカ聖公会との関係が深かった事を示す。このことは、共有して避けて通ることのないようにしないといけないのではないだろうか。
- 福島事故を受け止めて、私たち教会がエネルギー問題について訴えて行けることはたくさんあるが、私たち団体の声は、小さいと実感することもある。教会以外の地域の市民団体などと連携していくことも大事ではないか。
- 私たち聖公会の中では、教会や信徒個々に福島から自主避難されてきた方々への保養の場の提供や、そのお手伝いなどで携わっているということもある。全国には、そのような人的リソースはたくさんあると思う。しかし、それを活かしてきれていないのではないだろうか。
- 一教会単位で電力会社を選択することに、行き詰まっている状況があるので、教区単位などで電力会社を選択し、契約する方法などはないだろうか。
- 管区、教区、教会の連携をうまくして、原発の問題を発信していくことが大事だと思う。
- 省エネなどを取り入れる際の、融資制度を設けている教区があることも共有したい。
- この研修に参加した私たちは、教区、教会に持ち帰って、情報発信して、一人でも多くの方々に関心を持っていただくことが大事。
- 核の再生可能のイメージが私達の心に刷り込まれてきた。マイナス部分が理解不足だった。また、今でも本当に安全な技術があるのか、見極められず、核を否定しきれないでいる。
- 政治・経済的理由は立地交付金や原発マネー、また原発のある地域は電気代が安くなったり、電力会社の寄付でたくさんのパソコンがプレゼントされたり、といった状況下で住民の反対の声が出せない事などがあり、これらは基地の故にたくさんのハコモノができるものの、後の管理に苦しむ沖縄にも似ている。日本の経済構造の故に多くの人々の声を無視して原発は進められてしまう。技術の完璧さをいまだに誇り、推進すべきという「責任感」を持つ人々もいる。
- たしかに火力も水力も環境破壊のリスクを伴う。しかし、核の危険は質的に異なる。
- 視点を海外に向けると、日立、三菱、東芝などは原発関連技術を海外に輸出しており、原発の管理で収益を上げている例もある。燃料を輸入して技術を輸出する日本のあり方は、石油を求めて戦線拡大した戦前にも似ているのではないか。身の丈にあった日本の地域に合う電力供給が望ましい。
- 世界の環境を思う時、原発ではウラン採掘労働者の問題がある。(中国、アフリカ、カザフスタンなどなど)
- (SDGs の) 17 項目に対して原発の否定的な影響を考える時、ほとんど全てにとって否定的であると見る事もできるが、原発推進の立場から逆に肯定的に見るという事もできる。まだまだ議論が必要。
- 過去、原子力発電所を作る時、パラダイスを作るように宣伝された。今からのエネルギーは地域の人々が生きて行く悩みの中で準備する。
- 電力会社に莫大な金を与えられる状況。その金で政治や大学を支援する。
- 変化を恐れることが既存のシステムを続けようとする。3・11以降の福島住民は選挙でリーダーを入れ替えていく。
- この問題に対して一人ではなく、一緒に祈りたい(連携)。

- 片岡輝美さん。死ぬ時、自分に与えられた人生を自分が頑張って生きて来たかという質問から、原発問題や次の世代への関心を持つことになった。
- 核というような巨大な問題（お金・権力、イデオロギー）に対応して行くための力、原動力。信仰的な責任、勇気。
- 信仰の考え方、生き方（どうやって生きるかという質問と共にどうやって死ぬかという質問も大事。人間は必ず死ぬ被造物であることの認識、死から生を見る観点の変化）。イエス様の十字架の死と復活との共感。
- 原子力の問題は罪の問題。
- 食糧を得るためのエネルギー使用の問題。
- 地域から広げていく。
- 解決のための技術は発展されて、各地域が選ぶ状況になることを願う。
- 当事者であることを認識させること。
- 環境問題のために、便利さをやめるのはできると思う。
- 今回のプログラムを通して学んだこと、また他の人に知らせることが、環境問題のための実践だと思う。
- 未来の子供のために脱原発、核廃棄物を増やさない努力をするべき。
- 神が創造された地球環境を守るという信頼、信仰。満ち足りること、分かち合う心が大切。
- ライフスタイルを変えていくべき。
- 核兵器に転用可能なプルトニウムを所持していたいという思惑、アメリカの核政策への忖度、一部の利権者の圧力などがあり、原発を止められないのでは。
- 原発がやめられるか：実状を見れば見るほど難しい問題に感じる。
- 原発はお金、権力に結びついている。
- 地域の問題としていきる。

10. フォーラム 5「私たちの 教区・教会での働き」

私たちは
原発のない世界を求めます。
そのために祈り、行動します。

発題の概要：

2019 年 5 月の「原発のない世界を
求める国際協議会」から 2 年経過
した。そこで纏められた提言のいく
つかは実行に移されてきたが、まだ
まだ私たちの力も声も小さく弱い。

ドイツの倫理委員会メンバーの
お一人であるミランダ・シュラーズ
教授をお招きして講演を頂いた
ことや、川上直哉牧師の基調講演、
相澤牧人司祭の発題講演では何が



2019/8/24

「原発のない世界を求める国際協議会」(2019.5. 28~31 仙台・茂庭荘)

倫理委員会のレポートの内容

- ・原子力発電所の安全性は高くても、事故は完全には防止できない
- ・事故が発生した場合はほかのどんなエネルギー源よりも危険である
- ・次の世代に廃棄物処理などを残すのは倫理的問題がある
- ・原子力より安全なエネルギー源がある
- ・地球温暖化問題もあるので化石燃料を使うことは解決策ではない
- ・再生可能エネルギー普及とエネルギー効率性政策で原子力を段階的にゼロにしていくことは将来の経済のためにも大きなチャンスになる

強調されたかをもう一度要点を辿ってみた。そして、世界で唯一の原爆を投下された国である日本がどのような歴史的経緯を辿って、原子力発電所を積極的に導入していったのかを振り返ってみた。1953年の国連総会における米国アイゼンハワー大統領の「Atoms for Peace(核の平和利用)」演説によって、原子力は平和のための道具になった。そして次々と世界中に原発が建設されるようになった。地上核実験は禁止されたが、地下核実験は続けられ、核兵器は広く世界に存在する。日本は核兵器を保有しないが、プルトニウムを47トンも保有し、技術的には短時間に核爆弾を製造できる準核保有国と見做されている。フォーラム4では、

「何故人は原子力にかくも惹かれるのか」との問いに向き合ってみた。1950年代中ばにドイツの哲学者ハイデッガーは、世界の人々が原子力に未来の希望を見出そうとする中で、ただ一人、危険性を唱えたのであった。・・・が、福島第一原子力発電所の事故から10年経った今、私たちはキリスト者としても小さな存在であるが、一人ではない。無力ではない。教区や教会へ戻って新たな一步を踏み出すことが問われている。

また、フォーラム5では、事例紹介として、京都教区聖光幼稚園の「おひさま発電所」設置の経緯が、松山司祭から紹介された。(別項目として取り上げました。)

問いかけ：① 「おひさまプロジェクト」の紹介

- ② 教区・教会に戻って私たちが出来ること
- ③ 参加者ネットワークの構築
- ④ 教会は原発とどの様に向き合っていくのか

6 グループの話し合いから：

- 原子力対応では頓挫したが、災害対応という切り口で理事会を通った。
- 原発というテーマはタブーだった。教会の中で、賛成派と反対派と明確に分かれていた。
- 教会に幼稚園を持っている。幼稚園と教会の信仰の両輪。
- 幼稚園の施設の方が動きやすい面もあるのではないかな。
- 教会から幼稚園への働きかけがあると、幼稚園としてもありがたいのではないかな。

川上直哉牧師の基調講演から

十字架ヲ通ッテ光ヘ ～苦難の中からの声・惨禍の中の祈り～

- ・「平和のための核」(Atoms for Peace)によって原発が競って建設された。しかし、原発は核兵器のためのプルトニウムを作るためのものであった。原発と原爆は一枚のコインの表と裏である。
- ・世界戦争の参加の中で苦しむ人々が確かな信仰の告白をする。
- ・神は人の無能が露呈するところで「救済者」としてご自身を顕現なさる。
- ・人間の無能を許す神への信仰の内に人はみ摂理を見てきた。
- ・「原子力の問題はあまりにも巨大で深刻です。それに対して教会はあまりにも小さいのです。
- ・被曝地フクシマにある教会は、神の赦しのみ業を見るだろう。復活したイエスが、ご自身を教会の欠けの中にあらわされるだろう。私達は、ここに主の祈りを祈りなおすことができる。
- ・私達は、原子力の奴隷となっている自分自身の姿を見出している。

相澤牧人司祭の発題講演から

「いのちを守るために～原発のない世界を求めて」

- ・ 原発のない世界を求めること＝いのちを守ること。
- ・ 原子力発電の問題は、生命にとって極めて危険な放射性物質（いわゆる死の灰）を必然的に作り出してしまうことにあるのです。
- ・ 放射性廃棄物の処理あるいは保管問題は脱原発を実現しても残り続ける重大な問題です。
- ・ 原子力事故は戦争とのみ比較可能である（「脱原発の哲学」P33～）。
- ・ 人が生きる土台となるものを市場原理に委ねてはならない。
- ・ 原発の運転停止が国富の喪失との議論があるが、豊かな国土とそこに国民が根を下ろして生活していることが国富であり、これを取り戻すことが出来なくなることが国富の損失である（大飯原発3、4号機の運転差し止め請求裁判の福井地裁判決文の抜粋）。
- ・ 私たちは何者なのか・・・それは原子力発電をはじめとして、いのちを破壊することに対して否としていく生き方をするのではないのでしょうか。

- 原発に反対だし、みんなそういうふうにいる。私が接していたのは若いお母さんが多かった。原発が、というより、放射能を 10 年浴びたという恐怖が消化されていない。それが、原発反対運動に・・・。
- 癌になった人は放射能のせいかもしれないし、そうでもないかもしれないし、わからない。あえて、そういうことを話したくないという感覚もわかる。観光の町であって、そういう仕事に関わっている人が多い。
- 会津若松は 100 キロ離れているので。会津から小高や飯館に帰る人もいる。新しい一步を踏み出そうとしている方がいる。原発は終わって、前に進もうとしている方は、原発問題が優先課題ではないことが想像される。
- 比較的遠方の方が、冷静に判断して、絶対ダメということが、当事者の方々は感謝すると思う。
- 風化することが怖い。いのちの問題として取り組まなくてはならない。
- 微力だけど、無力ではないという言葉が心に残っている。
- 自分たちの自前の運動はできにくい。市内でやっている方がいる。それを教会の運動にしていく。
- 幌延に対する関心。核廃棄物処理場反対。反対運動のリーダーが、福島から子供たちを呼んで保養させる。全面的に賛成してきた。ただお金を送るだけではなく、バサの目的にはそれを掲げる。そういう目標があるので、毎週毎週やる。送ることができた。
- 2011 年原子力発電所事故。東電だったということが驚きだった。東京に住んで居る者にとっては。知っている人はいたかもしれないけど、どれほど共有されていたか。
- 太陽光パネルを設置することはできなくても、自分たちにできることとしてパワーシフト電力を買うことならできるかなと。
- 東京の電力は、東京湾岸の電力で賄われていると思っていた。なぜ、柏崎、福島にあるのか。東京の発電所がそういう所にある。
- ネットワークの作り方のアイデア。教会の外にある方々との協働。
- 東北は、日照時間が短いので太陽光発電は難しいのでは。土地土地にあった成功例、失敗例を分かち合うネットワークがあるとよいのではないかな。
- このことについては、ここに聞けば、教えてくれるという場所があれば。
- 東京教区では、FoE さんに教えてもらうというプロセスもある。
- 東京教区聖マーガレット教会のカレンダーも面白いなど。他の教会の方とかも、面白い事をやっているのかなと。
- 原発がなくなるためには。国民がエネルギーを省エネでいけるか。それをどうやって達成するか。
- 教会ならではの知恵を寄せ合う場があると底上げができる。
- エネルギーを少なく使うということを同時に行なっていく。
- 原子力を少なくすると同時に、自然エネルギー。使う方も。
- 段階的な転換を着実に進めていくことが重要。
- 地球の自然環境の循環性を考え、再エネの活用に貢献していきたい。
- 原発に限らず、政治と経済は結びついている。その中で女性が排除され、周辺に置かれてきた歴史がある。政治への参加も他人任せになり、自己決定権が奪われている。

- 女性の主体性の回復を目標にしているが、原発についても意思表示をすることが大切だと思う。
- パターナリズムの話聞いて、本人の意識を支配することが行われてきて、女性も子供も支配されている現実がある。
- 人が大切、信徒から変わっていくことが必要。福音によって変わっていく、人が変わるとハードも変わる。
- 教会の現状、3人以下の教会、平均年齢75歳以上の教会をどうするか、人が変われば教会は変わる。教会の維持だけでなく、共に維持・祈る仲間が大切。
- 教会のネットワークが聖公会では生かされている。
- エネルギーの支配は人間の欲求。植民地支配は資源を奪って支配することを人類の歴史の中でしてきた。いまだに旧植民地は搾取されている。日本も韓国人を徴用工として搾取してきた。そのことは和解する必要もある。植民地支配については、黒い歴史と反省もしている。ランベス会議でも世界に良いアピールができると良い。
- ネットワークが大切で、独自で何かをすることは難しいが、正しいことを言っても伝わらないが、「いのちを大切にしている」を前面にしていきたい。
- 電力会社の検討を教会で始めたい。ボーイスカウトで蓄電池の活用について提案したい。関心を持つメンバーがいると思う。太陽光パネルを設置している教会の情報共有をしたい。教会のご近所と、電気の話題での情報共有をしていきたい。
- 今回出されたテーマについて、継続的に検討するチームを設けてはどうか。
 - ・私たちの生活スタイルは変えられるか？省電力、省エネルギー、足ることの実践。
 - ・原発に惹かれるのはなぜか、こんな危険なものをなぜ反対せずに使い続けるのか。
 - ・教会でできるネットワークはどんなものがあるか、実践例。
 - ・今も苦しんでいる被災者へ支援は（裁判に訴えられるのは1部の人で、何も言えない被災者がいて、居場所を求めている）。
 - ・災害時に教会で何ができるか。
- 活動家としての働きのみではなく、キリスト者としての視点をもって参加していくことが大切。
- すぐにできることはホームページを見て欲しい。核燃サイクルを廃止するための裁判もぜひ見てほしい。
- 教会の建て替えを計画中。太陽光パネル設置⇒金銭的理由で見送りかも。教会単位でできることとして、パネル設置は再利用可能なエネルギーへのチャレンジとして捉えている。
- 市民協働発電⇒自治体で。システムの面で勉強できる。
- 大坂市民グループが多いが、改築の時期など。教会では電力使用量が少ない。課題である。
- 教会でのエネルギー使用、電力のみならず、車なども含め省エネルギー検討が可能？
- 電気は再生可能エネルギーを利用している電力会社と契約。自分たちが電気を作る段階を経て試みる。
- 山梨では、太陽光パネルは自然破壊の象徴として捉えられている。
- 山林を破壊して太陽光パネルを設置している。人間が入らない山と都市の境界にある地域の自然破壊が一番深刻。
- 私達の生活の見直し。
- 電気を使わなくても済む家づくり⇒屋上、ビルの上緑化により親環境へ。

- 教会では、関連事業(法人)、信徒を含めて連携し選ぶ。金銭面でのメリットのみ検討して選択している現実も。
- わかりやすく選べるガイドラインを提案。
- 国際協議会で、国際的な発信の意識は高まっているが、継続的な活動の中で展開中。
- Web で地球環境の日に合わせて、東北の声を聴き続ける姿勢を大切にして継続している。
- 人材養成。人とのつながり。奨学金制度などの運用。
- 米国、英国の聖公会の総会などにグループがいて、活動の成果を積み上げ続けている。継続的に取り組んでいる組織とつながることにより、可能性あり？
- 人を育てる環境を大切に。原発Pの予算を1000万円に！ 信徒も歓迎！
- おひさまプロジェクトに関して、具体的な活動であり希望がみえた。頓挫があっても短期間で設置まで至ったこと、教会外の団体との協働、教育に生きているなど多くの示唆があったと感じた。
- 情報交換を進めたい。各教区・教会でされている取り組み、今後各教会で勉強会などに取り組むための素材や情報源、講演者などの情報。オンライン勉強会であれば、他教区であっても参加可能になるのでは。また、具体的な取り組みを進めるため、各教区などの具体的方策の情報を知りたい。まずグループ内で何件か情報交換することとなった。
- 学習会などの取り組みについて、原発・環境問題についてまだ取り組めていない教区もある。今後知ることから取り組みたい。そのため上記のような情報を活かしたい。神戸教区では、現在ある平和礼拝や震災関連プログラムから広げることも考えたい。ある程度学習会などをしてきている教区では、そこからアクションになかなかつながらない、という課題もある。九州教区ではそのため、現在各教会、信徒から環境問題への具体的取り組み案を募っている。
- 各教区の担当部署について情報交換をしたが、社会部、宣教主事、伝道部と様々。
- 横浜教区では、既に「地球環境保護のための投資に関する融資」が教区会で決議されているが、こうした先行事例を参考に教区内で融資制度を検討したい。東京のパワーシフトの取り組みも参考にしていきたい。
- 教区内にモデル教会を作れないか。身近に取り組み事例があり、経済的にも成立するとすれば、取り組みやすくなる。検討段階であるが、中部教区ではパイロット教会ができれば、と考えている。
- 地域の核の問題を、原発だけでなく基地も含め見直したい。
- 教会外とのネットワークも大切、教会が社会に貢献することを考えたい。現在は信徒の個人的な活動にとどまっている。このグループでは、政治的課題を教会で取り組むとことの難しさを初めから分かち合ったが、再度この課題に戻った。「いのちを大切に」を軸に分断をつなぎたい。
- メーリングリストよりもHPを見やすくすることで、上記のような情報にアクセスしやすくして欲しい。そのページに行けば関連情報や各教区の取り組み、学習会情報などが見られるとよい。
- 学習会の講演者や具体的方策についてなど、相談窓口があるとよい。
- 学習会、関連企画、設備充実などの資金的支援や融資を検討して欲しい。
- 環境教育を担当するところが日本聖公会管区・教区の中にあって欲しい。
- ネットワークを作ること。

- 一緒に悩むことで一緒にする力も得ている。人との会話の中で解決策も見える。
- 環境運動を隣人に誘う。環境問題は女性問題から関心を持つことになった(eco・feminism)。
- 知らせることも実践していること。
- 環境が変わっている事実、出来事に誰が敏感に感じ、理解して、主導的に対応して行くか、温度差がある。温度差を強く感じる人、主導する人（当事者・被害者→主人公・神の民：聖書）環境が変わっている事実、出来事を実感させる。切迫さをどのように感じさせるか、説得力が必要。私は環境問題への実感、切迫さを強く感じていない。彼らの考え方・意見に基づいてサポートをしたい。
- 各教会も目の前の問題があり、環境問題への関心は足りない。
- 世界のどこかに不幸な人がいる。その不幸な人が幸せになることに取り組むべき。

11. 事例紹介：「おひさまプロジェクト」

おひさま発電所 京都教区 聖光幼稚園

京都教区聖光幼稚園は「自然の中で神様から注がれる愛を豊かに感じる」ことを大切に保育を行ってきました。2018年、当時園長であった松山健作司祭は、その理念の一環として、地球に優しい太陽光パネルを園舎の屋根に設置し、子供たち、ご家庭、保育者との協力により、自然との共生を考えて行こうと考えました。そして2020年11月25日に、沢山の団体や個人の後援、協力のもと、11.1kwの発電設備を完成することができました。事業総額としては518万円を要しましたが、市民、各種団体からの寄付、設置協力金、きょうとグリーンファンドの「おひさま基金」、学校法人聖光学園聖光幼稚園の資金、民間助成金などで賄われました。

「設置後、驚くことに園児たちは、自然エネルギーへの関心を高め、毎日モニターで発電量を確認しています。神さまの創造された被造物と共存することへの実践が始まっています。太陽光発電は『光』を集めて発電します。これそのものは化石燃料発電や原子力発電から自然エネルギーへの転換として重要な装置です。そしてさらに重要なことは、設置して変わりつつある私たち人間の思考や価値の転換であるように感じています。子どもたちをはじめ、私たち自身に環境をより保全しようとする心が芽生えています。その働きそのものが未来への『光』であり、聖霊の働きであり、イエス・キリストが私たちに示される希望であると感じています。松山司祭談（当時）」。



6 グループの話し合いから：

フォーラム 5 の中での講演の後、グループでの分かち合いの中で松山司祭（現在、金沢聖ヨハネ教会牧師）は以下のようなお話を分かち合われました。

- 脱原発の推進ではなく、災害時の園の電源確保の視点から実施に漕ぎ着けた。
2017 年当時、多くの人が原発に問題があることは理解していても、原発を否定するまでの空気を感じなかったこと。そして、再生可能エネルギーにまで関心が至っておらず、太陽光パネル設置（投資）による蓄電池等維持管理・売電・損得計算の話しを持ち出せる状況ではなかった。
その後、取り組みを再起するにあたっては、園所在地周辺での自然災害の観点から、急場における電源確保を力説し賛同を得ることが出来た。
→学び：教会内で取り組めるような視点から説明することが大事と思われた。
- 取り組みにあたっては、先行する諸団体との出会いが大きな助けになった。
すべてを教会や園で行わなければならないと思うのではなく、既に取り組みを行っている諸団体（京都グリーンファンド、自然派コープ、みんな空の下など）や自治体の協力を仰ぎながら進めることができた。公的補助金制度などの活用も有効に。
→学び：情報に接することを他人任せにするのではなく、意識して情報に触れるよう努力する。これにより連携の輪に連なっていくことが必要と感じさせられた。
- 園での発電は売電よりも自園でほぼ消費される。節電や消費エネルギーの抑制に努めている。
→学び：省エネこそ最大の電源と云われる。生活のあらゆる場面で、エネルギー消費そのものを少なくすることに対してもっと目を向ける必要を感じる。

以下は上記以外の分かち合われた内容です。

- 北海道：太陽光パネル設置は降雪地では難しく悩ましい。東北：宮城県中心部にある教会では、震災直後、ガスなどに比し電力復旧が早かった。一概に太陽光パネル設置がよいかどうか立地環境により異なるであろう。北関東：新しい教区創設に向け多くの課題があるが、こうしたエネルギーについても具体的に考えていく必要がある。東京：SDGsのひとつとしてパワーシフト（自然エネルギーへの転換）の取り組みを進めています。
- おひさまプロジェクトで、再度チャレンジする時に、原発をテーマにしなかったことが意外であった。
- 災害用の蓄電池の設置を 1500w ぐらいのものでソーラーがついているものを準備しているが、災害は必ず起こるものとして準備している。
- 災害時が、教会にとって新しいことを始める一つのチャンスとなる。今までできなかったことを周りも信徒も受け入れやすい。しかし、日ごろから地域との接触がないと、いざとなっても何もできない。教会の扉を開けていてもだれも入ってこない。日ごろからのネットワーク構築が大切。
- 教会の枠の中だけで、自分たちで何とかしようというのは捨てた方が良い。

12. 私たちの教区、教会の姿

各教区との「分かち合い」報告まとめ

○実施日、時間帯：2021.5.31（月）19：30～21：00（90 分間）

セッション担当者（司会）：浅原 和裕

各教区（沖縄教区を除き）に原発は存在している。本セッションの目的は、各教区において、3・11 以来所謂危険なことが十分証明された原子力発電所について、どのような関わりを持っているのか？また持ってきたのか？を事前にレポートしてもらい、参加者全員で「分かち合い」を行なうことである。内容として、①各教区における原発や核、環境に関する取り組み。②原発や核、環境に関する課題についての参加者自身のかかわりや活動。③期間中に分かち合いたいこと。の3点の内容に自由に記述いただき 20 名の方より提出があった。当初この方々のみに発表願うことを考えていたが、発言時間を 3 分程度とし、各発表者はコンパクトに発言をまとめられた故に、時間的に参加者の全員(PJメンバー含め)に発言の機会が与えられた。今まで様々な会議、会合で話し合われてきているものでも、今回のように自由な形で行われるのは初めての機会と思われ、その場では結論は出ない問題ばかりではあったが、結果的に後にネットワークづくりを進めていくためには十分意義があったと考える。以下はレポート提出者を中心に報告や発言をまとめたものである。

★北海道教区（広谷和文司祭）

- ① 広範な地域に 23 教会、札幌圏以外では関わるのが難しい現実があり意見交換程度。
- ② 道北分区（旭川、深川、留萌、稚内）の活動報告があった。
 - ア. 旭川聖マルコ教会では全信徒対象に勉強会を 2 回実施（講師 尾関敏明氏）、理解共有した。
 - イ. 教会報「群」にて 2 回にわたり「原発と私」特集を組んで各信徒が自分の言葉で思いを表現した。
 - ウ. 「エコロベツ自給のむら」に「マルコ・バザー」の収益金の一部を 5 年間送り続けた。道北 4 教会合同礼拝の信施の半分を上記に送る。
 - エ. 2017 年の道北 4 教会合同礼拝のテーマを上記に絞り、核廃棄物の埋蔵施設建設予定地の幌延町の「ゆめ地層館」の視察と学びを行った。
- ③ 2020 年「日本聖公会人権セミナー」の開催を、「過疎地の人権」の視点より上記幌延町にて開催予定もコロナ禍により翌年に延期、準備中である。

★東北教区（八木陽子氏）

東北教区として 2011 年 3 月 11 日の直接の地震、津波、原発放射能汚染の被災地のための取り組みは支援活動の 1 点である。この 10 年間の活動は、各教区からも多大な支援を受けた「東日本大震災被災者支援プロジェクト」（リーダー 長谷川清純司祭）に収斂され、現在は心のケア活動を中心に、買い物支援、近況報告の喫茶など現在も活動中である。また各地では仮設住宅訪問など支援活動が繰り広げられた。教区行事として「福島は語る」の上映を行ない共有してきた。

当時、若松諸聖徒教会附属幼稚園若松聖愛幼稚園の園長であり、震災避難者が多い中、保護者たちとともに様々な問題の悩みに寄り添い子供たちを守るため、片岡氏（今回講演者）の活動に協力してきた。

教区としては 2019 年、原発問題プロジェクト主催「原発のない世界を求める国際協議会」の会場に主教座聖堂仙台基督教会を提供し、ミランダ氏の講演会場とした。

★北関東教区（廣瀬清氏、平岡康弘司祭）

取り組みは十分ではないと考える。紙資源の削減、廃棄物の分別などを意識している。
凍土遮蔽壁の費用対効果や、汚染水の希釈海洋投棄問題など分かち合いたい。

★東京教区（笹森田鶴司祭、松村豊氏）

2021年4月より「東京教区パワーシフト・キャンペーン」を展開中である。各教会単位で電力を再生可能エネルギーに移行することをきっかけにして、環境問題についてキリスト者として考えるのが目的である。

東京電力がなぜ原発を東北地方に設置したのか？今東京に住むことになって改めて疑問を感じている。汚染水の海洋投棄が一方的に決まったこと。原子力はクリーンエネルギーとしてSDGsの中に取り込まれていることの疑念や危険といわれる以外に、経済的な観点より問題の分かち合いをしたい。

2011年「東日本大震災いっしょに歩こう！プロジェクト」に事務局に参加した。しかし当たり前であるが、当時は被災者支援が中心であり、この問題に直接タッチするにはスタンスが違っていた。

分かち合いとして管区（教区ごとではなく）が主体となって考え、実践できるものがないだろうか？補助支援金交付だけではなく、再生可能エネルギーのモデル構築など、具体的な考えを打ち出すか検討していく方向にならないだろうか？信徒の中に、脱原発、電力移行は必ずしもコンセンサスが完全に得られていない現実の中で、どう理解を取り付けるのか考える機会である。

★横浜教区（眞野玄範司祭、吉田仁志司祭）

「よっちゃばれキャンプin山梨」に実行委員として参加。放射能の不安を抱える地域に暮らすご家族が夏休みに山梨県を訪れ自然の中で心身をことほぐことが目的のもの。

メガソーラー設置のための大規模な環境破壊が進んでいることが気になっている。環境破壊とならないような理解、計画を進めるべきである。東電から生協パルスシステムに変えようとしたが、残念ながら法人契約はできないといわれている。

同教区として、「地球環境保護のための投資に関する融資制度」の紹介があった。エネルギーの濫用を抑止し電力削減効果がある設備をすすめるための融資制度。

★中部教区（相原太郎執事）

2019年教区会で、「日本聖公会『原発のない世界を求める国際協議会』声明に賛同する件」を決議した。「いっしょに歩こう！プロジェクト中部」では「原発のない世界を求めて」の連続学習会、福島訪問ツアーの参加。名古屋学生青年センター機関紙「こえ」で原発、環境問題を発信。個人的には『福音と世界』に立教炉の投稿（2019年3月号）。

★京都教区（大岡左代子司祭）

関西電力の原発について、反対運動をされている方のお話を伺う機会を持っている。

「各教会で省エネルギーを進めるための融資・補助制度」をつくり、各教会での議論が進むことを願っている。未来への責任として、女性デスクの関わりからSDGsへの取り組みを進めるうえにも学びを深めたい。

分かち合いとして、汚染水の海洋投棄の問題、地球温暖化防止と原発廃止との関連性について。

★大阪教区（古澤秀利司祭、寒河江研司氏、轟絢子氏）

人々からふつうの暮らしを奪ってまで必要性が認められるのだろうか？トリチウムと

DNA の関係、汚染水処理の悪循環、海洋放出の危険性、命を奪われる危険性の観点から学習を深めたい。教会建物に断熱効果を高める仕様や太陽光パネル採用の計画を模索。節電を考える。原発再稼働に向かう現実の再認識。命のために何ができるのか考える機会としたい。

★神戸教区（瀬山会治司祭）

毎年 8/6「広島平和礼拝」の関連行事として核兵器問題の学びを持ってきた。

東日本大震災時に教区報などで放射能（被爆）問題を伝えてきた。

被災地の見学奨励を行ってきた。新しい学びに期待したい。

★九州教区（李相寅司祭、安村妙氏、）

様々な文献を読んで学習を深めたい。

九州教区として「東日本大震災被災者支援室」を立ち上げ、被災地訪問ツアー、被災者交流、夏休みに福島の子供の受け入れプログラムの実施。

「福島は語る」の上映はコロナ禍により延期中。「原発のない世界を求める国際協議会」の学びの呼掛け、ミランダ氏の講演を DVD に編集し各教会に配布、視聴を呼掛け。

2021 年 6 月「環境の日」に向けて、各教会・信徒が取り組めることを回答要請。

教区信徒研修会（Web）で環境をテーマとして取り上げ、そのアイデアを環境取り組みリーフレットにまとめ作成検討。

教区の担当として様々な取り組みに参画してきた。過去の国際的な活動の中で、環境に関する問題については大いに興味があり参画してゆきたい。個人的には「原発に依存しない」生協の電力を利用している。

脱原発は、教会の取り組みについて反対の意見もあることの矛盾について、福島の実情に照らし合わせて知りたい。聖公会として環境問題、脱原発についてどうかわかっていくのか。

★沖縄教区（上原榮正主教、戸塚鉄也司祭、朴美賢司祭）

沖縄教区には原発がないので特別なプログラムはない。教会建築で太陽光発電を検討したが、環境にやさしい電力は残念ながら初期投資が大きい。1960 年代、漫湖は那覇港に原子力潜水艦が入港したために放射性物質（コバルト 60）による汚染が進み、魚類、貝類が食べられなくなったこと、洗濯もできなくなり憩いの場ではなくなったこと。そして結果的に産業廃棄物の捨て場になってしまったこと。このころはビキニ環礁で核実験が行われ、第 5 福竜丸の惨劇も起こっていた。補償問題など十分ではなかったと思う。当時は米軍がすることだから仕方ないと思っていた。最近、沖縄本島北部の安田にある米軍の北部訓練場で PCB が使用された金属片よりコバルト 60 が検出された、コンクリート固めの投棄物が出たとの報道。

米軍基地と原発、核の持ち込み、環境問題は同根の問題であり、沖縄県民は日常的にこのリスクと向かい合っている。中国との緊張問題で自衛隊の配備もクローズアップされている。

教区としては「One Family～つながるこころ福島支援プログラム」後は特別な活動はない。

神が創造されたこの世界は、人間が保全するものとして自然を大切にしたい。在日米軍基地の 75%は沖縄にあり、名護市には辺野古があり、基地移設については住民の 80%が反対している。それにも関わらず強行することは許されない。断固阻止のために座り込みに行く人のパーキングとして教会駐車場を開放している。

★正義と平和・沖縄 PJ（小林祐二司祭、横浜教区）

可能な限りの省電力。機器を入れ替える際の製作・破棄過程でのエネルギー消費も気にしている。

13. 閉会礼拝メッセージ（上原榮正 主教・正義と平和委員会 委員長）

創世記 1：1－2：6

父と子と聖霊のみ名によりて アーメン

「原発はやめようよ」の研修会に参加くださいました皆さま、足かけ 3 泊 4 日に亘るネットでの会議、お疲れさまでした。またこの研修会を企画し、実行して下さいました、原発のない世界を求めてのプロジェクトの皆さまと、ご協力を下さいましたすべての皆さまに感謝を申し上げます。

私は、プログラムから感じたことは、良く考えられて研修会が組み立てられているということでした。研修に参加された皆さまも、そのように感じられたと思います。

最初に、日本基督教団の片岡輝美さんの講演を通して再確認したことは、2011 年の 3 月 11 日の東京電力・福島第一原子力発電所の事故は、今も続いているということです。私が片岡さんのお話で驚かされたことは、その時の原子力緊急事態宣言が今も発令中であるということでした。

事故から 10 年も経っていますから、緊急事態宣言はとっくに解除されていると思っていました。改めて、原発関連の情報にも耳を傾けなければならないことと、国や政府の発表に惑わされることがなく、真実を見極める知恵も知識も必要だと感じました。

次に、北海道教区の尾関敏明さんからフォーラム 1 から 5 までのプレゼンテーションをして頂き、各グループで話し合いを致しました。尾関さん、ありがとうございました。

フォーラム 1、2 の「教会とエネルギー」、「核のゴミ」「原発事故」で、私たちの生活はエネルギーに支えられていること、また資源と、経済発展、地球環境との間に大きな問題があることを、学びました。

①経済発展、②エネルギー・資源確保、③地球環境、という枠組みの中で、どれを選ぶのかということ、トリレンマ問題と云うそうですが、この 3 者択一問題は、本当に悩ましい、難しい問題を孕んでいると思いました。

先進国に住む私たちは、環境保全を優先すべきとの声をあげる人が多数だと思います。でも、貧困な社会、発展途上国などに住む人たちはどうでしょうか。豊かに生活するために、経済発展や資源・エネルギーを優先したとしても、私たちには批判できないと思います。

また、食料やエネルギー確保のために環境を破壊したとしても、生きるためには仕方がないと思っている人たちもおられると思います。トリレンマ問題は、私たちにジレンマを感じさせます。

でも選ばなくてははいけません。何故なら、選択しなければ、重大な状況になるからです。地球環境は、回復不全になりつつあります。

フォーラム 3 では、ドイツの「安全なエネルギー供給のための倫理委員会」のことや原発に替わる再生可能エネルギーについて、利点と問題を学びました。自然保護、環境保全のため、また地球温暖化を防ぐ CO2 削減の声を上げながら、痛みつつもフンダンに電力を使う、今のエネルギー政策からの脱却が必要であるとの声が聞こえました。

フォーラム 1、2、3 で原発と再生可能エネルギーについて学んだ私たちが、フォーラム 4、5 では、電気・エネルギーとどう向き合うか、個人や教会の今後のアクションについて、話し合いを持ちました。今の時代、これが正解です。という答えはありません。

はっきりと言えることは、原発の安心、安全の神話は、福島第 1 原発事故によって崩れた

ということです。福島原発が語ることは、原発は最も危険なエネルギーである。事故を起こせば、取り返しがつかなくなる。そして、クリーンエネルギーを謳う原発から使用後の燃料は、安心、安全を脅かす核廃棄物となり、その処理には各国が頭を悩ましている、ということです。

フォーラム2の後、各グループから寄せられた声の中に、原発と人類は共存できない、核の問題を未来に、子供たちに先送りするな、と言う声がありました。もっともです。だから再生可能エネルギーを使うようにしようというのが、フォーラムの流れだったと思います。

しかし、実際には、太陽光、風力、バイオマスなど再生可能エネルギーにも、価格、設置場所、使用後の処理、環境などで問題があり、全てが「良し」、とは言えないのが現状です。

人類はエネルギーを如何に多く持ち、自由に使うかで、繁栄してきました。エネルギー問題は豊かさと、また貧しさからの脱却、解放とも結びついています。エネルギーをどれほど持つかは、私たちの生活、暮らしの質とも関係しています。

先ほど、創世記の創造物語を読んでもいただきました。神さまがお造りになった地球は、全てが「良し」でした。神さまは、人間を造られた時、「産めよ、増えよ、地に満ちよ」、と生物を祝福し、人間に世界を支配する権威を与えられました。

最初、人間も動植物も自然サイクルの中に生き、バランスが取れていました。しかし、人間がバランスを崩してしまいました。「原発はやめようよ」の研修の前の週に、ゴジラ・キング・オブ・モンスターという映画を見ました。映画で、ある女性科学者が、地球で1番のモンスターは、人間だと述べていました。

他の生物から見たなら、資源開発のために自然を破壊し、生態系を変え、プラスチックや爆弾、大量の放射性物質など、自然循環の仲間になれないものを作り、利益のためには何でもする人間は、他の生物からみればモンスターです。

この状況下に、地球がうめいているように思います。パウロは救いを願って、**被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。(ロマ書8：22)**と述べています。

神さまの造られた世界が、人間の開発、乱用によって、呻いています。人類は、他の動植物と共存なしには生きられません。人間も自然の一部です。でも、そのことを忘れていているように感じます。この地球で全ての生物と共に生きる、今を生きる私たちの課題です。でも、人類も生物も、原発や原爆の核や放射能とは共存出来ません。

地球が呻いています。私たちも、一緒に呻きたいと思います。そして、その呻きを大きな声に出来たらと思います。小さな呻きではなく、誰の耳にも聞こえる呻きにすることです。

日本中の人が、世界中の人が共に呻くようにするのです。そうなれば、核の問題もどこか1部の問題ではなく、地球全体の問題となれると思います。

最後のまとめとしては、方向が違ってもかもしれません。原発と原爆は表裏一体、コインの裏表だと言われます。戦争のための武器や核兵器、その開発や維持に使われている膨大な資金と、エネルギーと資源があります。

単純かもしれませんが、それらのお金やエネルギーや資源を戦争ではなく、私たちの生活のために使う世界になれば、地球温暖化や、エネルギー問題、戦争、貧困、飢饉、いろんな問題がもっとたやすく解決される気がします。

14. 参加者名簿

★教区参加者（21 名）

北海道	司祭	広谷和文	(G1)		志賀直信	(G2)
東北	司祭	渡部 拓	(G2)		八木陽子	(G1)
北関東	司祭	平岡康弘	(G1)		廣瀬 清	(G2)
東京	主教	高橋宏幸	(G1)	司祭	笹森田鶴	(G1)
		松村 豊	(G2)			
横浜	司祭	眞野玄範	(G4)	司祭	吉田仁志	(G3)
中部	執事	相原太郎	(G4)		松村 隆	(G3)
京都	司祭	大岡左代子	(G3)			
大阪	司祭	古澤秀利	(G3)		寒河江研司	(G4)
神戸	司祭	瀬山会治	(G5)			
九州	司祭	李 相寅	(G6)		安村 妙	(G5)
沖縄	司祭	朴 美賢	(G6)	司祭	戸塚鉄也	(G5)

★青年参加者（2 名）

轟 絢子	(大阪・G4)	松村 希	(中部・G2)
------	---------	------	---------

★管区担当者（11 名）

正義と平和委員会

委員長	主教	上原榮正	(沖縄・G6)
沖縄 P	司祭	小林祐二	(横浜・G5)
ジェンダー P	司祭	金 善姫	(中部・G4)
原発問題 P	司祭	長谷川清純	(東北・G2)
	司祭	小林 聡	(大阪・G4)
		浅原和裕	(東北・G6)
		池住 圭	(中部・G5)
		尾関敏明	(北海道・G1)
		福澤眞紀子	(東京・G3)
宣教主事	司祭	卓志 雄	(東京・G3)
総主事	司祭	矢萩新一	(京都・G6)

合計 34 名

※ (G○) は、グループの番号 (およそ宣教協働区毎)

「原発のない世界を求める週間」



6/6 Sun ~ 6/12 Sat

関連企画

オンラインフォーラム『原発はやめようよ』

前半 5月30日(日) ~ 6月1日(火)

5/30 公開プログラム (YouTube ライブ配信)

15:30 ~ 16:00 開会の祈り・メッセージ

16:00 ~ 18:00 講演

「考えること悩むことは、いのちに向き合うこと
~福島からのメッセージ」

講師：片岡 輝美 さん (会津放射能情報センター代表)

どなたでもご視聴
いただけます！



PW: peacebewithyou

※以下のプログラムは、各教区代表者のみご参加いただけます

5/31 フォーラム1 「教会とエネルギー」
フォーラム2 「核のゴミ」と「原発事故」
分かち合い 「私たちの教区、教会の姿」 ほか

後半 6月6日(日) ~ 6月7日(月)

6/6 フォーラム3 「再生可能エネルギーの活用」
6/7 フォーラム4 「私たちにできること・私たちの責任」
フォーラム5 「私たちの教区・教会での働き」

地球環境
のために
祈る日

6 / 6

「世界環境デー」(6/5)
直近の主日

※「地球環境のための祈り」
(送付状や管区HPに掲載)
をおさげください



2021 年
日本聖公会

100%
自然エネルギー



日本聖公会「正義と平和委員会」
原発問題プロジェクト